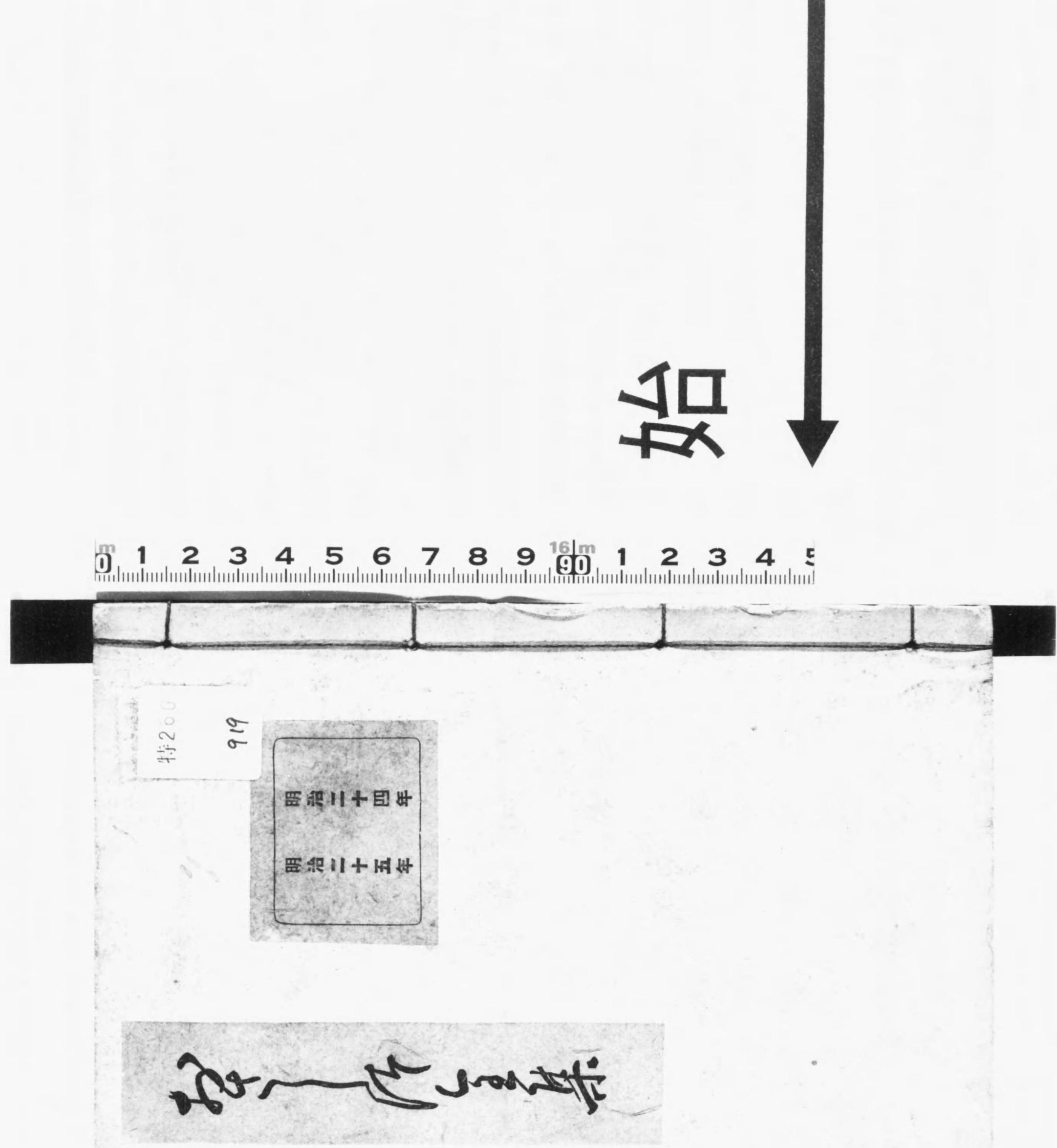
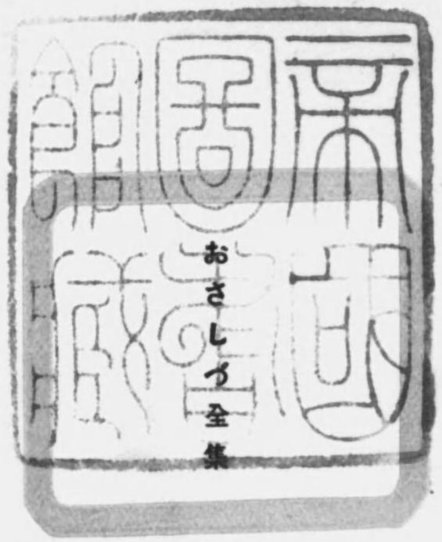

明治三十四年
明治三十五年
特200
919

特 260
919



御さしづ（明治二十四年）目次

△明治二十四年一月八日朝、寺田達之介身上障り御願（一頁）
△同年一月八日寺田半兵衛御地場へ出る度に腹痛するに付御伺（二頁）
△同年一月八日朝、天水組集談所の御願（三頁）
△同年一月八日朝、こゑづとめの願（三頁）
△押してのねがひ（三頁）
△同年一月八日井筒梅次郎息女二人同じ障りに付御願（四頁）
△桝井氏押して御願（五頁）

△又桝井氏出張のこと押して願　（七　頁）
△同年一月十八日桝井、高井兩氏大阪眞明組へ出張につき御伺　（七　頁）
△押して　（八　頁）
△同年一月二十一日上田奈良糸身上事情により て御願　（八　頁）
△同年一月二十二日寺田半兵衛身のさはりにつき御願　（一〇　頁）
△同年一月二十三日午前一時刻限のお話　（一一　頁）
△同年一月二十七日夜九時刻限のお話　（一三　頁）
△教祖様のお社並におみす内外へかける机を新しく調へる御願　（一五　頁）
△御面の願　（一六　頁）
△同年一月二十八日夜八時半刻限のお話　（一七　頁）
△平野氏答へてたんのふしてをられます　（一九　頁）
△同年一月二十八日夜九時刻限の御話　（二一　頁）
△同年一月二十九日夜十一時三十分刻限の御話　（二四　頁）
△同年一月三十日午後一時親族一同御出席の場にて　（二六　頁）
△同年二月七日夜二時刻限の御話　（三二　頁）
△同年二月八日夜（舊十二月晦日）御本席様身上御障りにつき御願　（三四　頁）
△おしての願　（三六　頁）
△引つゞいて　（三六　頁）

△同年二月八日（舊十二月晦日）刻限の御話　（三七頁）
△引つゞいて　（三八頁）
△同年二月八日（舊十二月晦日）夜十時半
第一、教祖樣五年祭々主の件　（三九頁）
第二、正月二十六日、二十七日、二十八日
三日日限の件　（四〇頁）
第三、節會日限五日、六日、七日の件　（四〇頁）
第四、分支教會より祭日當日提灯各徽章を
出す件　（四〇頁）
第五、東京本局員招待の件　（四一頁）
△同年二月八日（舊十二月晦日）夜十時半、教
祖樣五年祭の件御願の跡にて引續き指圖　（四一頁）

△同年二月八日夜一時半神道本局招待の件につ
き相談の上押して御願　（四三頁）
△押しての御願　（四三頁）
△同年二月十一日（舊正月三日）東京見合の使
者前川氏出張の願　（四四頁）
△押して清水氏も出張御願　（四五頁）
△御教祖御社のみす中のしきものゝ御願　（四五頁）
△同年二月十七日御神樂御面修覆御許の御願　（四五頁）
△押して御願、御頭のぢ白にとりかへましたの
でありますか、又はそのまゝにいたしおきま
したものでありますか　（四六頁）
△增野正兵衞の新築の宅をかりましてさして貰

ひましてもよろしきでせうか御願　（四六頁）
△甘露台破損致しましたに依りつくろひにして置きましたものでありますか又更に木にてつくりたものでありませうか御願　（四六頁）
△上段の間五年祭につき疊表替の願　（四七頁）
△同年二月十七日教職昇級の事に付五月よりむつかしなるに付東京より今の内にのぼすものあれば昇級さするがよいと申し來りましたがこれが昇級さしましても宜敷御座いますかの御願　（四七頁）
△押して御願、御道につくしましたその事によりておうじて昇しますので有りますかの御願　（四八頁）

△同年二月二十日（舊正月十二日）御本席様身上御願　（四八頁）
△同日夜會長様齋主遷座の御願　（五二頁）
△古き社を火にもやす願　（五二頁）
△御勤するに甘露台かの御願　（五三頁）
△夜一時におつとめの事　（五三頁）
△同年二月二十五日五年祭信徒に供する竹の皮包及通常參拜人に供する辨當の願　（五三頁）
△同年三月三日朝　（五四頁）
△一時山本氏の名前に約定致す事願　（五四頁）
△同年三月四日、御教祖様御靈璽御遷座神殿の東の方か、北の上段の間かへ願度伺　（五五頁）

△祭式の場
△普通參拜人へ餅を廢すること　（五五頁）
△祭式初日は北の上段の間にして、後二日は甘露台の場所にて御許願　（五六頁）
△同年三月四日梶本みち障りに付御願　（五六頁）
△同年三月六日神樂御勤の場所の願　（五七頁）
△同年三月十日御本席樣御身上願　（五八頁）
△同年三月二十五日（舊二月十七日）同村北村平四郎地所の件　（五九頁）
△當教會一等教會に昇級御願　（五九頁）
△御本席樣東京へ御越に付御許願　（六〇頁）
△押しておきかせあり　（六〇頁）
△遠州へ御立寄の願　（六〇頁）
△同年三月二十八日飯降おさと身上御願　（六〇頁）
△同年三月二十八日御本席樣なり教長樣出京の御願　（六一頁）
△おして　（六二頁）
△御出京の際本局へ事情運ぶの願　（六二頁）
△同年四月十日御本席晝飯後御障りあり御伺ひの處　（六三頁）
△押してこの處へでありますか上原氏への授けでありますか　（六四頁）
△同年四月十日東分教會役員秋田縣へ出張の御願引續いての御話（上原氏）　（六四頁）

△押して渡し方を御伺　（六四頁）
△同年四月十四日東分教會より秋田縣へ派出の御願（赤尾、千田氏）　（六五頁）
△同年四月十日御本席様東京より御歸會の御願　（六五頁）
△同年四月十五日玉惠様身上御障りに付事情御願　（六六頁）
△同年四月十八日本橋支教會々長中台勘藏氏身上御願　（六七頁）
△同年四月二十日上田奈良糸身上事情御願　（六九頁）
△同年四月二十五日本局大會議につき教長様出頭致すにより御願　（七〇頁）
△出越す處御許し下されたく押して御願　（七一頁）

△三人御隨行事情御願　（七二頁）
△同年四月二十七日中山玉惠様齒の痛みに就いて身上願　（七二頁）
△同年四月二十七日御本席様戸主の名前政甚様へ切替への願　（七四頁）
△同年四月二十九日、日々事情を以て本席様へ願に出る處願人一人尋出一人の指圖の處願て貰う人連てださして貰ひましたものはそれはなりませんものかの事情御願　（七五頁）
△同年四月二十三日寺田半兵衞娘こう十九歳なるものせきいで又孫貞之介六歳眼病に付御願　（七六頁）
△同年四月二十三日河内國守口にて説教所御願　（七七頁）

△同年四月二十三日林大吉はこぶ事情の願　（七八頁）
△同年五月二日本局へ代理の願　（七八頁）
△同年五月二日御本席様身上御障りに付御願　（七九頁）
△同年五月五日御本席様身上の御障りに付御願　（八一頁）
△同年五月八日夜御本席様御身上御さわりに付御願　（八四頁）
△同年五月九日夜十一時半刻限の御話　（八六頁）
△同年五月十日先の御指圖に基き心得のため御願　（八九頁）
△押して御願　（九一頁）
△同年五月十日教長様御居宅新築の御願　（九一頁）
△同年五月十日永尾楢二郎目の障に付御願　（九三頁）

△同年五月十三日山澤氏子供三人共身上に付御願　（九三頁）
△同年五月十日神道管長天機伺、露國皇太子御見舞のため御出發に付京都迄會長様出迎の御願　（九五頁）
△おしてお願　（九五頁）
△會長様隨行増野、梅谷、永尾御願　（九六頁）
△同年五月十五日夜十一時二十五分御本席様身上につき刻限　（九六頁）
△同年五月十六日午前九時御本席御身上障りに付御願　（九八頁）
△同年五月十八日夜十一時刻限の御はなし　（一〇〇頁）

△同年五月二十一日梶本松二郎身上願　（一〇三頁）
△同年五月二十五日梶本松二郎身上速やかならぬにつき一度御願　（一〇五頁）
△同年五月二十一日寺田半兵衛氏娘かう、孫貞之介兩人身上すみやかの上事情御願　（一〇六頁）
△押しての御願　（一〇七頁）
△同年六月三日梶本松二郎妻うの身上より小人みち障りに付き御願　（一〇七頁）
△同年六月三日橋本、永尾兩人三重、和歌山兩縣下巡教御願　（一〇九頁）
△同年六月三日寺田半兵衛娘たき（二十六歳）身上障り御願　（一〇九頁）

△押して今日より御別席運して貰ふ事情御願　（一一一頁）
△同年六月八日越後地方へ本部より鴻田氏出張願　（一一一頁）
△同頃前の指圖につき本部から行つて邪魔になるであらうと話ししている處へ　（一一三頁）
△同又何か談示の上願話している處へ　（一一四頁）
△同年七月四日寺田たき前々の事情から再び御願（二十六歳）　（一一四頁）
△同年七月四日紀州和歌山集談所地所買入の事情御願　（一一五頁）
△同年七月八日寺田半兵衛娘かう（十九歳）なるもの七月三日よりせき出で腹へひゞき痛、

頭痛したる處、四日に姉たきお授をいたゞき歸宅いたし、早速御願候處、直に頭痛癒り、餘りの御利益なし、又候半兵衛五日の夜頃、右の脇腹よりかふらかへりしたやうにて、一時間ばかり身の自由用叶はず、又六日右の肩につまり、頭痛致し候に付七日に御地塲へ出て候御願仕り候處御利益を戴き候ゆゑへの御願

（一一六頁）

△同年七月二十六日天水組林氏紀州日高村行に付御願

（一一八頁）

△同身上御願

（一一八頁）

△同年七月二十三日夜八時、御本席樣身上御障りに付御願

（一一九頁）

△同年七月二十三日夜、先からの御指圖に基きて御願

（一二一頁）

△同年七月二十四日午後二時昨夜の御指圖にもとづきさんげの處本部員一同に御願

（一二四頁）

△同年八月二十九日永尾氏身上願

（一二七頁）

△同年九月七日寺田半兵衛身上にて七日以前より夜分せきいで晝はすみやかなる事情の御願

（一二八頁）

△岐阜縣の方の事情押して御願

（一二九頁）

△同年九月三十日大和國十津川日の元講派出の御願

（一三〇頁）

△同年九月三十一日右につき山澤、永尾兩氏派

出の御願

△同年十月十二日天水組分教會の願　（一三〇頁）

△同年十月二十一日天水組分教會設置御願　（一三一頁）

△同年十月三十一日、過日二十八日の朝大地震に付名古屋愛知支教會へ見舞のため宮森、永尾兩氏出張願　（一三三頁）

△各分教會より清水氏代理の義願　（一三四頁）

△明早朝出發の御願　（一三四頁）

△同年十一月一日（舊九月三十日）上田嘉次郎娘奈良糸事上から御願　（一三四頁）

△同年十一月一日梶本松二郎土佐行もどり大阪よりだん〳〵身上の障あげくだしに付御願　（一三六頁）

△同年十一月二日梶本松二郎身上願、にはかに御本席様身上障り是も松二郎身上につき　（一三七頁）

△又引つゞいて御はなし　（一三八頁）

△押して願　（一四三頁）

△同年十一月三日梶本身上きびしきに付御願　（一四四頁）

△押して御願　（一四五頁）

△同年十一月五日朝七時十五分俄に刻限の御はなし　（一四五頁）

△同年十一月五日震災のため見舞に名古屋へ出張せし高井、宮森、清水、永尾歸宅の御屆　（一四六頁）

△同年十一月六日朝教長様御令閨齒の痛みにつき御願　（一四六頁）

△同年十一月六日朝梶本葬祭來る十二日擧行の御願（一四八頁）
△又押して日限の義御願（一四八頁）
△同年十一月九日午前一時半頃教長樣御身上御願（一四九頁）
△引つゞき（一五〇頁）
△同年十一月九日引つゞき刻限のおはなし（一五一頁）
△同年十一月十五日夜一時御本席樣御身上より願（一五四頁）
△同年十一月二十日綱島分教會政府出願の願（一五八頁）
△右につき永尾樣出張するの御願（一五九頁）
△同年十二月一日飯降おさと樣御身上願（一五九頁）
△おして可愛想といふ處はどの處で有りますか願（一六〇頁）
△同年十二月七日綱島分教會舊二十六日月並祭御許の願（一六一頁）
△三日、十三日、二十三日說教日御許の願（一六一頁）
△月並祭御勤め事情は他教會所通御許の願（一六一頁）
△同年十二月八日西宮支教會出願に付永尾出張の御願（一六二頁）
△同年十二月十九日夜御本席樣身上御障りにつき御願（一六二頁）
△同年十二月二十八日寺田半兵衞身上さむけたち身ちゞまるやう思ふ又娘かう口中あれ、新

之介せき出て候に付御願　（一六五頁）
△晴天の如くの心　（一六七頁）
△一度二度かやす理の事　（一六七頁）

御さしづ（明治二十四年）目次終

御さしづ（明治二十五年）目次

△明治二十五年一月十二日御本席様身上御願　（一七一頁）
△同年一月十二日夜晝の御指圖にふるき處といふ處押して御願　（一七四頁）
△同年一月十三日午前五時半前夜指圖に基き本席一條の件御願　（一七六頁）
△同年一月十四日前の御指圖より本部内に在るものゝ内ならん者をたすけるつなぎの願　（一八〇頁）
△同日御話研究の事御願　（一八二頁）
△引つゞいておはなし　（一八三頁）
△同年一月十四日夜前々よりの御指圖の件會長

様へ運びしあとにて御願　（一八四頁）
△同年一月十六日寺田まつ身上障につき御願　（一八五頁）
△同年一月十八日飯降おさと御身上御願　（一八六頁）
△同年一月二十一日福知山支教會願につき永尾
　出張の御願　（一八六頁）
△同年一月二十六日教祖御墓所三島へ新墓地を
　設けそれへ移轉の事御願　（一八七頁）
△同時教祖御履歴編輯の義御願　（一八七頁）
△同時節會の件例年の通り致さんならんもので
　ありますかまた改めてもかまいませんか伺　（一八八頁）
△同年二月一日永尾楢二郎大腹痛に付御願　（一八九頁）
△同年二月三日節會中分教會より提灯献燈の願　（一九〇頁）

△おして　（一九一頁）
△同年二月七日（舊正月九日）朝舊正月七日き
　ぬゑ安産八日の晩よしゑ腹痛につき御願　（一九一頁）
△おして願、梅谷氏より然らば是より直様咄を
　取次ますかと申さる　（一九二頁）
△同年二月七日夜永尾よしゑ身上しきりにせま
　るに付御願　（一九二頁）
△同年二月十日夜衆議院議員選擧に付今村勤三
　氏と平田郡長より玉田氏を投票なしくれとの
　事に付　（一九四頁）
△押して御願　（一九五頁）
△又押して　（一九五頁）

△同年二月十一日飯降さと様身上御願　（一九六頁）
△同年二月十一日永尾よしゑ身上御願　（一九六頁）
△同年二月十四日夜（舊正月十六日）永尾よしゑ身上しきりにせまるにつき御本席様赤衣をめし下されて　（一九七頁）
△押して桝井氏より早くつれかいれと仰せられますはどなたの事で御座いますか　（一九八頁）
△押して是非今晩はこばんなりませんか又明朝迄御猶豫下されますか　（一九八頁）
△同年二月十四日夜十二時二十分永尾よしゑ身上まだ遠かせず御願の處へ桝井、高井氏園原へ御出下されい、奈良糸同道で御かへり下されて

候故其の事情を併せて御願　（一九九頁）
△おして清水氏より安神の事情と仰せ下され候は世界の道を運ぶのでありますかと御伺　（二〇〇頁）
△押して今晩運ばんなりませんか　（二〇〇頁）
△しばらくして　（二〇〇頁）
△同年二月十六日（舊正月十八日）夜一時よしゑ身上御指圖より奈良糸のもどり御禮返事併せてよしゑ身上御願　（二〇一頁）
△同年二月十七日夜（舊正月十九日）永尾よしゑ身上今一段速やかならぬ故御願　（二〇三頁）
△おして　（二〇五頁）
△又押して　（二〇五頁）

△同年二月十八日（舊正月二十日）よしゑ身上
今一段あざやかならず夜前の御指圖に三つ一
つの理とおさとし下され候は如何の事であり
ますかの御願　（二〇六頁）
△同年二月十八日夜永尾よしゑ前御指圖より會
長様御出席の上御願　（二〇九頁）
△おして奈良糸の事情願　（二一一頁）
△おして二名三名の處御伺　（二一三頁）
△會長様へ御受申上被成候　（二一三頁）
△おして給仕は日々三度づゝ致しますので御座
りますか　（二一四頁）
△しばらくして　（二一五頁）

△同年二月十九日教祖様御居間へ座蒲團火鉢も
出しおきましてよろしきや　（二一六頁）
△御三寶膳取替の儀　（二一六頁）
△同年二月二十日三重縣より奈良縣へ照會せし
につき伊賀地方布教のため橋本、永尾願　（二一六頁）
△明日より出立の御願　（二一七頁）
△同年二月二十三日永尾よしゑ身上御願　（二一七頁）
△同日永尾よしゑ身上願　（二一八頁）
△おして願　（二一九頁）
△又おして願　（二一九頁）
△同年二月二十四日夜永尾よしゑ身上すみやか
ならず、なら糸かへる心にならぬより御願　（二一九頁）

△同年二月二十七日教祖御墓地用豐田山買入願（二二二頁）
△同年二月二十九日永尾よしゑ小兒きぬ枝身上合せて御願（二二三頁）
△續いて御願、泉田の小人とらをもりにおく事情（二二三頁）
△又つゞいてたつゑ身上御願（二二四頁）
△おして御願、一人の事情とはだれの事で御座いますか（二二四頁）
△同年三月十四日芦津部内池田支教會所地方廳出願につき出張願（二二四頁）
△同年三月三十一日堺支教會開筵式出張の御願（二二五頁）
△同年四月七日寺田國太郎身上御願（二二五頁）

△同年四月八日永尾よしゑ腹痛み絹枝せき出づるに付合せて御願（二二六頁）
△同年四月十二日和歌山天水組講社栗本、湯川兩人所業宜しからず取調べのため出張願（二二七頁）
△同年四月十四日寺田半兵衛身上御願（二二八頁）
△同年四月二十五日永尾きぬゑ腹痛烈しくしきりに泣き乳あげるより御願（二二九頁）
△同年四月二十八日夜十二時十五分御本席樣齒のおさはりの御伺（二三〇頁）
△同年四月三十日御本席樣五月一日より芦津分教會開筵式御出張の御願（二三二頁）
△同四日より引つゞいて南海分教會へ御出張の

御願
△同年五月　日御本席様南海分教會へ御出張に付隨行員山本、平野、山澤より無事歸會の旨御申上被成度　（二三二頁）
△同年五月十四日夜御本席様齒のおさはりに付御伺　（二三三頁）
△同年五月十六日井筒梅次郎身上願　（二三七頁）
△同年五月二十九日御本席様齒の痛、頭痛に付御願　（二三八頁）
△同年五月三十一日御本席様身上御障りに付前御指圖により願　（二三九頁）
△同年六月三日、五月三十一日御指圖に二つ三つだすによつてとあるより一同相談の上願
第一、御本席様他より招待の節一同相談の上會長様へ申上順序正しくする事　（二四一頁）
第二、御本席様に對し日々の扱に付何か不都合ありますか願　（二四三頁）
第三、上田奈良糸の事情　（二四三頁）
第四、村田長平氏の事情　（二四四頁）
△同年六月四日夜刻限の御咄　（二四五頁）
△同年六月十五日前刻限の御話により又御本席様身上御障り願　（二四八頁）
△同年六月十八日午前三時十分刻限の御話　（二五〇頁）
△同年六月二十四日教祖様御墓所玉垣造る事御

願

△同年六月二十四日會長様御歴代御陵御參拜のため御出向の願　（二五四頁）
△右に付隨行清水、梅谷、松村の三氏御願　（二五六頁）
△同年六月二十七日午後三時十分刻限　（二五七頁）
△同年六月三十日御札を戴きしもの又御幣を願出る時は兩方下げてよろしきや　（二五八頁）
△御幣を下げますに付是迄誰かれなしにして居りますが如何に御座候や　（二五八頁）
△御幣寸法の事　（二五九頁）
△御授順序の事、御本席出るのは日に三人宛でありますが初席は致しますが講社の數に應じ割付て矢張日々三人宛としてよろしきや御願　（二五九頁）
△御ごくの事　（二六〇頁）
△押して願　（二六〇頁）
△押して願　（二六一頁）
△教祖豐田山墓所の事　（二六一頁）

御さしづ（明治二十五年）目次

明治二十四年

御さしづ（明治二十四年）

△明治二十四年一月八日朝寺田達之介身上障り御願

さあ〳〵尋ぬる事上尋ねにやなろまい、どうでもなろまい、どういふ事である日々の處の事上、日々にわすれられんよく〳〵事上きゝわけ、どうなろといふ心もたずして日々の理である、よく〳〵きゝわけどふ事かふいう事上日々心にもたずなるべく一つ事情始めかけたらなんたる事上もたすどういふかういふ事もさあ〳〵心まではかる、よぎなき事上あるどうしたかりしたさき〴〵あんじなきやう事上をさめくれるやう、ほつておく事もなろまい、内々事上あるさき〳〵めん〳〵家内をさめてくれ

るやう。

△明治二十四年一月八日寺田半兵衛お地場へ出る度に腹痛するに付御伺

さあ〳〵身の内の處どういふ事である、どういふ事とおもう、又道々いろ〳〵心えん、いつ〳〵おもふ事上きゝとつてあちこち事上はこぶ、すみやか事上なくば事情はこぶ事なろまい、一度二度いつ〳〵事上どういふ事とおもふ、どんなこともきゝわけ、内々事上にも度々事上心えんしやんつくまい、さとする事情なんの事とも上もなきたにみるせかいにみるをさまりある心えん身の内かしものかりものさとしめん〳〵よく〳〵事上さとしよくをさまつてある、かるき處になんの事上あざやかの事上とわかるへんじよ何たるよく事上をさとしてをさめるならすぐ

とをさまる。

△明治二十四年一月八日朝天水組集談所の御願

さあ〳〵これまでだん〳〵どういふ事、かういふ事一どならず二どならずさとしてある、ずいぶんどういふ事もかういふ事もせにやならん、どういふ事もせまくてならんといふさしづ何かの處ゆるす心をきのう事上はかるがよい。

△明治二十四年一月八日朝こゑづとめの願

さあ〳〵つとめの事、まあとうぶんのところ事上さとしある、まなびなにかの處にちげんの處さとしあるひそやか。

△押してのねがひ

さあ〳〵ひそか〳〵つとめしたらきく第一の處助けおびや一條一年と日をきつてあるそこまでの處。

△明治二十四年一月八日井筒梅次郎息女二人同じ障りに付御願

さあ〳〵尋ねるところ、たづねるところ、小人のところ身のさわりがあつて、一時どういふ事である、何がまちがふてある、はつさんどういふことをさとす、分らん〳〵、分らんからたづねる、一つ實際一日のところ、なれど身のところ、ずいぶんすみやか、たづねばなろまい、事情きゝわけ、どういふ事かういふこと、しんじつ一つの理といふはあふか、あはぬか一つの理、身上一つについて一つの話、何がまちがふ、どうなる事情、なんにもまちがひはない、これから先きなるならん、たづねたら事情さとししよう、しんじつの一つの理があれば治まる、眞實どんな事も尋ねられん、どんなむつかしい事ろくに見ても、多くの中その中せかいの中、それぞれの理もをさまりついた一つの理、どういふ事かういふ事、一度の理がまた一つ、どうなりかうなりはじめようか、それ〳〵だんじあひ、よく理をきゝわけ、まづ〳〵十分の理がをさまらうとも一つの理といふ、多くの中の理、めん〳〵の理がどういふものと思ふ、元々いんねん元々の理、五十年の理をきゝわけ、またじゆん〳〵一時の理、一時にをさめる、これまで外に事情おもはず、おだやかにをさめかゝる、はじめかける、それ〳〵一つの話つたへ合、じゆん〳〵の理もいかなる理も治める、これようきゝとつてくれるやう。

△桝井氏押して願

さあ〳〵、尋ねるであらう〳〵、ぜん〳〵以て一つ身上、なに

からさとしおいたる處、めん〳〵まづ〳〵の處、一つのしるし小さき處の理せくであらう、たづねるからさとしてある、だんじ合それ〴〵の理はせけど、一時事情はせく事いらん、一時十分ひとつときに理をゆるす、長らへての道〳〵、深き事情どういふものであらう、おやといふ理になつて、どういふ事もかういふ事も、親にはかれば一寸に理をきゝわけ、十分子が成人する、おや〳〵の理子にある、子に眞實あれば理がある、ふるい者は親といふ、親の理が治まらん、どういふものである、ふるいほどむつかしい、本部〳〵〳〵の理をきゝわけたら、長らく年限の間、此の年限から一つ處〳〵はじめかけ、いつちふるい處おやの理、失ふも失はんこの地場本部や、ふるき親なれば十分の理がなければならん。

△又桝井氏出張のこと押して願

さあ〳〵おや〳〵〳〵の元々の理、おや〳〵〳〵の理をさとし、十分の理をさとしくれるよう。

△明治二十四年一月十八日桝井高井兩氏大阪眞明組へ出張につき御伺

さあ〳〵尋ねる所〳〵、さあ一つの事情一つの理、それからそれ〴〵の中尋ねる、これまでじゆん〴〵さとしある、急ぐやない、せくやない、他に一つの理あきらかな理、めん〳〵事情どうであらうと思ふ、眞實一つの理を以て通ればならんではない、年限の道をみて理を始め、事情は幾重といふ、かゝりといふははかりがたない、世上といふやう〳〵の事情、なんどにもさとしある、元々の處理を見て、年限の長いあひだであつては

といふ日もあり、日々の道をとほりてみちといふ、どういふことでたゝずといふ理でもだす、たんのふ一時どうといふ、理せくやない、いそぐやない、いそがいでもあきらかな理をもつてとほれば、その日がくる、おや〳〵といふ、どんなことでもおやにかゝる、たんのふ一時どうしても、どうあと〳〵じいつとゐるがよい、遂に道をあけるほどに。

△押して

さあ〳〵、他に一つ〳〵思ふてゐる處、十分さとしておやといふ理をきゝわけてゐれば、はつさんするであらう。

△明治二十四年一月二十一日上田奈良糸身上事情によりて御願

さあ〳〵尋ねる事情〳〵さあ〳〵まあ一寸の處にての事情も定

めにくい事情であろ、さあ〳〵どうであろといふ事上であらう親や〳〵いまかうではさき〳〵そこで心の事情が定まるやうで定まらん、内々どうであらう、陽氣とおもふ事情から事情きゝわけ、一名ぐらしといふてはやうにさとしたる、元地場といふこれまで長らくの間の道すがら聞いて通りたであらう、見て通つたであらう、長い道の中にいさんだみちもあらう、一名ぐらしなら一名ぐらしの道があり、たのもしい事情があり、なれどもこれたのもしいみちとほさにやならん、ぜん〳〵もつてさとしたる、道はいんねん〳〵の事情、これは三年の間といふ道にはこびたる、五十年の道〳〵あひだの道、二年三年にはなるやならん、これ心にをさめなき、らくの心にもつてながらく心にをさめてでる、日々の日たのしめばながらく心にをさめてでる

日々の日たのしめば、ながらくいままでのこと、ふあんに思ふてなんでもとふさにやならん、一名一人ぐらしさとしたる理から定めてくれるやう、人々に十分はなして内を十分心をさめてくれねばならん、なんぎささう、不自由ささうといふ親はない、なれどめん〳〵に心に事情もつてはなにほどふしようとおもたとて、心どうもならん、いつ〳〵までどうりでたのしみといふ事上、早せにやならん、咄を聞いて心に理ををさめて世界中よせたのや、今からかうといへばかう、又のち〳〵と云ふはのち心をちつけば又々のち〳〵これだけ、咄しをつたへてくれねばならん。

△明治二十四年一月二十二日寺田半兵衛身のさはり
につき御願

さあ〳〵かゝるであらう、おもうであらう、よぎなき事上、こころにかゝるよくきゝとれ、わかきがわかきにたゝず、年が年にとうらず、さき〳〵の事上、おもくはどうなろとおもふ、はこんだる事上は通さにやならん、心一つの理日々の事上一つ理、一つ心、因縁一つの理があらう、よくきゝわけ、年がとれたるといふ理はない、身にじ上あんじる事はいらん、事上とほさにやならん、よくきゝとりて心どんと一つの理心をさだめてくれるやう。

△明治二十四年一月二十三日午前一時刻限のお話

さあ〳〵〳〵これ〳〵どんな事も、こんな事もこれまでは神一條ではじめた、道を人間の心ではじめるやうに思ふて居れば結構と思ふ、神一條の道とは何かの事もきゝとれ、ふるき道にど

ういふ事もきかそ、だん〳〵いくへやすむ處もある、今一時ならんといへば向へ〳〵走つて行くやうな道を通してきた、人間の心はどうもならん、人間のおもふ心では何もならん、おかしい事を云ひかけると思ふやらう、もうどんならん、もう〳〵めん〳〵かつてを尋ねるさき〳〵の處どうならう、かうならうとあんぜ〳〵の道を通してきた、これまでの道といふは五十年以來の道はなんでもかでも通つて來た、云はゞこしかけたやうな道や、まあ〳〵長い間の處にてどんな事もだん〳〵し込ふおもへども、そこまでいかなんだそこで一つの道をかへた、今まできいた道かしかけたやうな道、人間心ではじめた道か、尋ねてみよ、神にたづねるのやない、人々心に尋ねるのや、さああす早々つたへあひ、しつかりだんじせんことには、何を尋ねてもすつきりいかんで、さあこれだけさとしおく。

△明治二十四年一月二十七日夜九時刻限のおはなし

さあ〳〵今一時尋ねる處、だん〳〵のはなしをしてある、だんじつたへをさまりかねたる處それから順序一寸をさまりた、どうしても一時にをさめられん、もうこれどんな事も十分にときいかした、世上の處なんでもわからん、ばら〳〵になつて心配かけた、日がらはわずかにて十分の道をつけようとおもふていて、世上からなんでもかでもうちつぶさうと思ふてゐる、あやぶい處もはなしきいた、あんな處によう理があつたなあといふてもつぶすにつぶされん、もう〳〵つぶれる理はない、ないと云へばもう〳〵十分と思ふやらう、なれどそこに一つきゝやうとりやう、神のみちはむねの道、世上のみちはどんな事してゐ

ても、目にさへ見えねばとほりていける、なれどむねの道は皆身にかゝる、道に二つある世上の道、むねの道、世上の道にはどんなあながあるやしれん、又つるぎがあるやらしれん、神の道はむね三寸の道であるから、通らうと思ふても通れん、これさへ十分ときかせば、どんな事もみなをさまる、ぜん〳〵の處にさしづ、内々事上しんぞくの事上をもつてたづねでよさとしたる、今まではどんな道も通してきた、一つにはどんな日もあつた、また一つには三十年以來かゝりかけたつとめばしよう、中に事上であつた、しんぞく事上にはわかりやせん、世上は皆親子兄弟といふて、しんぞくといふても兄弟、なんにもへだてる理はない、どれだけ内々事上、しんぞく事上といふても、きいてゐるやらう、みてゐるやらら、いふてゐるやう、三てん三つたてあひ事上、しつかりしんぞく事上をさめてくれるやう。

△教祖様のお社並におみす内外へかける事机を新しく調へる御願（一本に明治二十四年一月二十七日

（舊十一月二十七日）御教祖五年祭に付教祖様の御霊舎を新造御許願又御居間へ御簾かけること、机の新調の儀併せて御許の願とあり）

さあ〳〵尋ぬる事上〳〵、尋る處どうしてかうしてと思ふ〳〵處、まあ一寸ほんのざつとにして、なにほどたいそはすること いらん、これがきつしよう、どういふ事かういふ事なににべつだんたいさうな事はいらん、ひながた通り〳〵、かはつた事はいらん、一寸ぜん〳〵まつりかたといふもならん、社といふさ

しづをもつてひながたしようがい定め、ひながた通りにしてさとしくれ、きつしようの事これだけ、一つはこぶそこでたづね、尋ね通りにち〳〵の處をさまり一つの社一寸ひながた、このひながたでたものでないで、ひながた通り治めてある、かりやしろをさめある、ふうのかはつてあるちがうたひながた、一年ひながた道があれば一年ひながただしてひながたとまたひながたかへていかなる理もさとしある、日々尋ねば日々さとす、これまでふは〳〵といふものでで心といふ、此の道一つわかつた事すれば、ひながたとはいはん、世上といふふうのかはつたものはひながたといはん。

△御面の願

さあ〳〵もと〳〵一つもと〳〵たづねさしづ〳〵ようふるきものはそんじてあるなれどしかへとはいはん、いるべきものはそれ〳〵こしらへにやならん、一寸ふそくなつたら、そこでいらざらんことは一つもいらん。

△明治二十四年一月二十八日夜八時半刻限のおはなし

さあ〳〵あらひかへてすみやか、日々の處からどういふ理がでるともわからん、さあすぐと〳〵はなして、しんぞくの理をもつてほつておけんといふはどれからでたか、此のやしきでは親族の理では世上たすける事ができん、くらうかんなんの道を通りてきて、理をきくなら一つの理も通さう、かぎりなき處までつくさうといふは、どういふ理であるか、中山家の續くまでたすけるといふは親族の理であらう、三十年以前の理をきゝわけ

るなら、何にもわからんやない、ざんねんの道も通りて來たわい、なんでもかでもあしばがなくばつけられん、いがめてなりといためてなりとあらひかへて、事上是れまで通りどんな事もきゝわけ、一年でまいたたねが一年ではへる、二年でまいた種が二年ではへるのもある、またまいたたねがはへんのもある、なれど一たんまいたる種はどうでもかうでもはやさにやならん、はへんといふ理はない、どんな事もだんじしたとてきくものやない、ざんねんさうだんする人もなし、かゝりかけた道どうならうとざんねん〳〵の道もこして來た、なみだをこぼしてこして來た日もあつた、たねをまいたからけふの日や、ひろい地塲があつても種をまかねばくさ山や、くさ山は草山のねうち、たねがあればこそ修理があり、修理がしたならこそ今日の

日や、これをようきゝわけてくれ。

さあ〳〵さあ〳〵たづねかけ、咄しさあ〳〵あさはとうからどん〳〵ふうもかまはず、はしりあるき、さむい時はさむい裝束、あつい時はあつい裝束、扇子づかひではなにになるか、これだけはなしすれば皆わかる前々にもはなしてある、三つのたてやひといふたかさとしたか、むかうになんといふたぞへ。

△平野氏答へてたんのうしてをられます

けつかう、わかるなら神一條をたづねる、神一條の道を通れば只一人のふそくはあろまい、たつた一人のくもりがあるそこでくどきかけたのや、これまで内々事上神に尋ねた事はあろまいかつてに通つて來た、たつた一つの道がにごつてあるどうも速

かならん、そこでくどきかけたる、さあ〳〵ざんねんとも思はずはづかしいとも思はず、神であつて何の事上も通らず、今の一時のさとしを聞いて、しんから前々の理が分りうれしいと思へば、一つさんげができねばならん、なる時なら誰でもする、ならん處を通り、いふに云はれん、こすにこされん心も、ほんにどんな事やなあといふて、ざんねんの道も通りたといふ、何もどうする事はいらん、なれどたつた一人の心でうごくことも出來ん、どこもみられん、一人すくんでいにやならん、是迄にも尋るなら、心受取りて指圖する、さしづは違はんやうきいてくれ、違ふさしづして、一日の日がてるか、てらんか一の理を聞いてくれ、前々より一つの理も尋ねやせん、今日の日はざんねんであろ、けなりかろ、なれどかつてにしりつゝして來たのや、今日の日はきがねない、しんぞくといへどもどうもならん、これまでそれだけの道を通りて來たなら、どこのなにがしと國々までもひゞく、今一つの理をみよ、どうもならん、心うちとけあらひかへ、まいたる種は神がみな受取りてゐる、うけとつた種はみなはへる。

△明治二十四年一月二十八日夜九時刻限の御話

さあ〳〵くどきかける〳〵、ざんねん〳〵、くどき〳〵ざんねんの中から道がつく、たのしんできいてくれ、くどきかけたらどういふ事くどくやわからん、さあ〳〵苦勞の中でかくれたものをつれて出るで、こまかにかきとれ、中にもはなしをきいたものすくないから、一寸皆々きいてくれ、くどきかけたらわかる、一寸きいてくれ、まあ〳〵ざんねんで〳〵〳〵〳〵ならな

んだ、神様がでさしやつた、苦勞艱難でのくにのかれん、どこへでようといふてでられんからほつておいてもとおもふて道の間はあちらへであるき、しんだいもなくしどうしようにもかうしようにも、その時のざんねんその理がのこつてある、どこへどうしようもたのみがひもなし、そこでせんぞよりつたへてある、どうぐを賣拂ふた、それだけの事上、今日だけいささかなもので、いさゝかなものもならん日があつた、その時そんなざんねんくやしそれ〳〵きいてくれ、ざんねんであつた、これは一つ今しんばしらかぢや〳〵、七八年といふは、いつも〳〵やつかいになつた、そのうれしさはどうしてもかうしてもわすれられん、やう〳〵の處一寸かくれてゐる、一つざんねん〳〵一つのしなもあたへをもつて行かねばいかなんだものざんねんといふざんねん〳〵〳〵年たつは早いものほどなうあちらへかくれ、一代もすぎまた一代、今はわからんこれだけ十分になつた、一つにはきるにきられん、ざんねんの中ざんねんの理があつた、ざんねんの理ほどこはいものはないで、ざんねんの理一代でいかにや二代、二代でいかにや三代、きるにきられんいんねんつけてある、これはのくにのかれん理によつて、なれど神にきる神はない、なれどきれる心はどうもならん、あざごとにもすてことば神は大きらい、いんねんつき身の處なつてこそ、すんで〳〵すみきりたか世上の理とうぜん理ゆくずあざことばすつきりきらひ、すつきりたてかへ神の事上、年とれたものあついさむいの事上いらん、ようの事情だしただけや、たゞ一人いんねんの事上から理をひきて生れだしたるそれからやう〳〵

きゝとつてもらひたい、すつきりたれどうしたといふでない、めん〳〵もおぼえなく大病ひしたといふではない、ふそくじゆう〴〵うたがひたら〴〵、あれは心にしとるのやといふて、尋ねんからさとされん、なれど一人の因縁を以て、たいせつの身上あるなれど、どうもならん、ざんねんばなし、くどきばなし、今日はどうなりとできる、どうなりとなる、又々事上それ〴〵の事上、そこまではとどこまい、よう事情きゝとりてさとしてくれるやう。

△明治二十四年一月二十九日夜十一時三十分刻限の

おはなし

さあ〳〵〳〵だん〳〵事上をはなすれば一つ事上、一つの理はあざやか、なにかあんじようきゝわけ、一つ心がなくばたつた一どのはなし、二どともたずねかやすわからん、かりにも一夜のまと、ぜん〳〵にもさとしたる、さんげ〳〵のかどがわからず云うてもわからず、あれでいかん、これでいかんといふ、みなそれ〴〵思へども人間の事上として人間といふ、とりつぎといふ、これまでにもみわけてくれ、きゝわけてくれとだん〳〵さとしとりつぎには せきのくらいまでつけてある、みにくいみぐるしい處は、皆さうじをしてくれねばならん、かゞみやしきにごつてあつてはどうもならん、かゞみやしきが四方正面ともいふ、すこし位こんな事位といふ理がむさくろしい、ねたみあひといふ理が、みてゐられん、これでさうぢはしまい、これだけみわけんならん、みわける事は遠慮はいらん、遠慮するのはわからんからや、かげでいふ事は重罪のつみといふ、かげでい

ふならそのものすぐにいふてやれ、みのためや、くるものにいねとは云はん、こんものにこいといふやない、心でつくすものとげんばでつくすものと、ようみわけ、かげへだての理のなきやうに高い處は高うにみる、ひくいものはひくうにみる、これからは何も遠慮はいらん、かはりにあの人さへあれだけなりと、めん〳〵もさんげといふ。

△明治二十四年一月三十日午後一時親族一同御出席の場にて

さあ〳〵一同親族〳〵事情から一寸はなしかける一寸よびだした處一同に一つ〳〵のはなしをきゝわけるからだんじといふ理がわかる、一同にでよ、一同にきけといふやうきゝわけ、めん〳〵の身のさわりより、どういふ事さとすやらわからん、あら

ひきるやらわからん、だん〳〵事上をくれ一つ〳〵の事上あらひかへ、あらためかへ、さらへかへ、長らへての理もさとし事上に一つの心をよせて、これから一つと云へばはじまりといふ、はじまりならば一つこれまでといふはとほく事上ではあろふまい、へんじよの處ではあろまい、日々の處みなわかる、かんなん一つの道を通つたまた通したやうやうの日きゝとつてくれ、神がくどきばなしすればしんじつきくならさとせるやらう、なんでもつくすやらう、だん〳〵事上もさとす、さとせばせかいといふつゝんだやうなもの理によりてわかりくる、一寸うはつら身の處不足なつて、神さんたのんでたすけてもろたといふはそれだけの理のものを入つて、つゝんであるやうなものゝ、だん〳〵わからんやうになる、一同にはなしといふはおま

への尋ねの時にはどうであつたと、めん〳〵にはわからんから一同一つの理にさとさうといふ、前々より二ど三どのさとしあら〳〵の處はさらへた、さらへば水もながさにやならん、ながせばたまる、たまればさらへにやならん、やう〳〵一年といふこれから二年といふ事情をさとしおくによつて、よくきいてくれ、二年の間の理といふは、よほど事上ある、うれしいやうな道であつて、身の處にて前々のはなしには、又々の理をさとさうといふてせきをやすめてある、どうしようしらんといふてある、親族一同にさとしおく、多くの中にたつた一人の心、一人のこゝろといふ人々あれども一人の心一つようきゝとつてくれ、どんな事もこんなこともこれしたらよいと心をよせる、まちがひの心からどんな事出來るともわからん、わからんやな

い、なつて來た一人の心の理といふ、世上へださにやならん國々夫々ちよい〳〵との處もうせわしい處もみえてある、それは知らん今年の年にとればどういふものと思案、思案したとてよい思案はできん、何といはれようが心を定めたら萬人の心といふ、四方正面かゞみ屋敷の中に一つみるもそのまゝ、深きの理ほどきいたる、かくしてもつゝんでもみなしれる、どんなものやさかいどうやとはいはん、親族一同の咄何であつたぞいなあといふふるき尋ねばならん、そもわからん道があつた、一つの心といふ、なんでもかでも一つの心はとほさにやならん、ごもくの中に一つの心、すつきり掃除はできん、ぼつ〳〵の道をはじめかけて、一だんといふ、一だんといふ理は二だん、二だんのぼれば三だん四段といふ、のぼるには一つの心こげつきの

理、さびづきの理といふは、研いでもはげん、つくねかへねばならん、しんの心になるほどの理がをさまらねば、どうもならん、これなら一つの心ををさめるなら、けつこふなる道といふ、もんかたなき理といふ、日々の理ををさめるなら一つたんのふの理がなけりやならん、たんのふはあらためた心の理、もうすつきりごもくはばらへた、これからはじめ、一だん二だんの理からはじめる、これがだい又一つかわる〳〵。

さあ〳〵いそいではやくだん〳〵〳〵はやく〳〵〳〵のさとしがあつて、まだ〳〵の道と日をおくり、此事上いづれ又みなぜん〳〵にだしたから、おもての理をきゝわけ、裏表の理は、くどう〳〵にさとしたる、裏には一つどうにもかうにもならん事上があつた、今年もやれ〳〵又今年もやれ〳〵、日々をおくり今年は十分又十分心をしづめてきけ、元々の處へ一つの理といふ、それよりはじまつた理、これもきいてくれ、なんぼはなしがあるともしれん、三四日やすめてある、そこでまた一人のあらためかへ、どれから見てもほんに元々の理といふはつくさにやならん、今一時助け合一つたのむあきらかな理、これでこそつくされたならこそといふまだ存命中ならといふ、十分事上をたのむ、あきらかにして大さうとおもはずして、古き一人の心十分受取つてある、ならんことをせいとも云はん、どれから見てもほんになあと、日々古き道が日々にかはる、早く事上を聞分けて大層と思ふやろ、もんかたなき處より一つはじめた、十分一つの理をたのむ。

△明治二十四年二月七日夜二時刻げんのおはなし

さあ〳〵こくげんを以てはなしかける、どふいふ事はなしかけるならもう一日の日もやう〳〵の日あけるなら一つといふいかなるも皆今一時、筆にかきとる處一日の日がたつ、一日の日が移る、五年〳〵と五年の日に移る、四方〳〵處々にもいつれ〳〵五年〳〵どういふ事ばんじ何かの處はなしかけるによつて事上は一つ人間の心といふはさら〳〵もたぬやう、五年たつたらどういふ道もわかろまい、世界の道も分ろまい、一年たてば一つ事上、又一年たてば一つの事上、年にとりて六十一年おかげ〳〵とまちかねた、又一つには改心〳〵といふ、明治の代といふ、國會といふしらず〳〵まつてたのしみはさらにあろまい、一夜のまの事上を思案せよ、國會二十三年といふた、又一つの事上、おかげ〳〵の事上とよう思案せよ。

さあ〳〵あければ五年といふ、ばんじ一つの事上を定めかけ、定めるには人間の心はさら〳〵いらん、弱い心は更らにもたず遠慮きがねはいらん、さあ思案してくれ、これから先は神一條の道、國會ではをさまらん、神一條の道でをさめる、こわい道があつてやれたのしみ、五年事上〳〵もうたちきつたる一つの日から世上には餘程の理もはこび、やう〳〵の理が一寸治めかけ、をさめかけはむつかしい道である、どういふ事もむつかしい道、年があけたら五年一日の日からはじめる、國々の處萬事とりしまり、だんじのけつはだれがとる、これまでよりもさしづといふさしづ通りの道なればどんな事も遠慮するやない、きがねするやない、たのしんだ五ケ年、たのしんだ日、又思わく

一つの事上は、又々たづねてくれるよう。

△明治二十四年二月八日夜（舊十二月晦日）御本席

様身上障りに付御願

さあ〳〵〳〵一寸はなしかける刻限の處どういふ間も、かういふ事も前々以てさとしおく、さとしそれ〳〵理がない、事上を早くといふむつかしいであらうなれど事上をきゝわけ、身上なんでもなき處、どういふものぞいなあといふ話の事上にはなし聞く、はなし聞いても、きゝ流し、もうこれでよければよい、如何なる事もきゝわけ、身の處事上ある不足ある、どういふ事を尋る、みなさとしある、それだけの諭きいて事上をさまつてある、何かに聞分てくれ、どういふ事が治まつてある、むつかしい様でむつかしない、なれどむつかしい事のさとしをするが

日々の事情、その日〳〵の樂であらうまい、一日の日よりの樂は何にもたのしみになろまい、よう思案して見てくれ、めん〳〵それ〴〵身上に事上あつて長いのもみぢかいのもある、皆夫々の心より思案して見よ、さしづまでの事上や、きくまでの理である、何べんだんじてもそのまゝでは何もならん、さあこれからすつきり洗ひかへ、樂み〳〵一年の理三百六十日といふてある、一年といふ三日といふ樂む事上、どういふ事上、如何な事も聞分け、一年の事上なくして三日とはいへようまい、何時までもこれであらうと聞いて事上定めて定まろまい、日がたてばそのまゝ前々さしづ一寸まあほふぐ同様のもの、それをほつておいては何よのさとしもできようまい、さあ〳〵早く〳〵きいた通りの事上はやく〳〵。

△おしての願

さあ〳〵事情ほふぐといふ事上、ほふぐはどういふ事、どんな咄をきく、むつかしかつた、力がついたであらふ、その日どんな指圖も反古といふ、どういふ事もきけ、一つには又々の道をはこび何かの事も運びようさとしくれ、だん〳〵の事上諭したであらう、皆一つ〳〵の理がわかるやうきゝわけてくれねばならん。

△引續いて

さあ〳〵みなめん〳〵にさとする理で云ひにくい〳〵といふてゐたらいつまでも云ひにくい、さしづを以つて話すなら何も云ひにくい事もむつかしい事もあろまい、わかつた處からさとするは何も遠慮きがねはいらん、どうでもあれはかうといふなら

かうといふ事上をだせ、事上をだして尋ねでよ、さあ〳〵何もむつかしいことはない、道とおもへば何もむつかしい事はない、又一つには遠りよはあろまい、日々の處前々にも大ていくどき〳〵たる處、どうもならん、日々ほつておこうにもおけん、日々の處事上がかさなれば、どうもみぐるしい、むさくるしい、どんなおほきい事になるやわからん、如何なるもみがきたて洗ひ立てる處、ふき掃除してどうでもかうでも、みがきる、ぬつと出る事上はさとすにむつかしかろふ、云ひにくからう、何も云ひにくいことはないで。

△明治二十四年二月八日舊二月晦日刻限の御話

さあ〳〵仕切て話する此事眞柱につたへ、さあ〳〵どういふ事傳へ、親族きつてきられん中、すてるに捨てられん中一戸〳〵

の事上、世上〳〵の事上、親族は親族の理がある、切つて切られん理がある、親族は親族だけの心おきなうをさめてくれやう、かゞみやしき〳〵うつとしいてらすこと出來ん、云ひにくかつたであろ、これだけつくしんばしらせつない事上であらう、それだけの事はこんでやつてくれるがよい。

△引つゞいて

さあ〳〵また一つよう聞分け、くるものにくるなとは云はん來ぬ者にこいとは云はんといふははなしのだい、みぐるしい處それから人々二年三年の理がなくはなろまい、理を理とどういふものはどんな大きい理になるやらしれん、世上谷底からはこぶ、席々と運んで二年三年の理、これから運んでくれねばなろまいさとりではないですつきりした指圖、これで掃除すつきりや。

△明治二十四年二月八日（舊十二月晦日）夜十時半

第一教祖様五年祭々主の件

さあ〳〵咄しかけたら咄すであらう、まあ〳〵どんな事でもだんじの上といふてある、だんじだけでは、これがよいと云へば又一つなんにもそんなむつかし道を通るやない、まあどれから見ても高い處は、けなりなものや、なれど必ずの理にもたぬやう、短い處よりかゝれぎり〳〵と人間心の理にもたてる、人間心の理ではいづれ〳〵の理がでる、理がはしる、どうすることもいらん、心丈の理は十分受取、大さうの理は受取れん、すつきり受取れんで。

第二正月二十六日二十七日二十八日三日日限の件

さあ〳〵その處はだんじにまかせる〳〵、心おきなう三日ならば三日の處、だんじの上ならそれにまかせおかう。

第三節會日限五日六日七日の件

さあ〳〵一寸はじめかけた處始めかけた理はかはさんがよいで、變るといふとどういふものぞいなあと世上の理がでる、無理にどうせいとは云はんなれど變らん樣。

第四分支教會より祭日當日提灯各徽章を出す件

さあ〳〵心丈〳〵、もう大層な事は一つもいらん、大層な事は受取れん、たのもしいといふ理は、日々受取つて日々かやしていかんならん、大層はいらん、これだけさとしおく。

第五東京本局員招待の件

さあ〳〵一人だけは一人だけの事上ではこんでやるがよいで招待はならん〳〵今の内に招待すれば向もよからうこちらもよからう、世上もよからうなれど、よいことのあとの思案をしておかねばならんで。

△明治二十四年二月八日（舊十二月晦日）夜十時半

教祖樣五年祭の件御願の跡にて引續き指圖

さあ〳〵一寸やすみ又一寸休み、身上の處さわりつけはなしかける、どんな話刻限以つて話す、尋ねてのはなし、二つの理をきゝわけ、こくげんと云ふはどういふことと思ふ、違はんが刻限、刻限の話聞いて、何もかも運びこれから十分のさんげさしてきた、仕にくい處も色々話して、もりがわかねば何もなら

ん、身上に障あればどうでもかうでも話さにやならん、むさくろしいものは掃除せにやならん、可愛相な事や、もう〳〵たのもしい道が見えてある、なれどめん〳〵心よりすることはどうもならん、今の道をみていりやうまいものと思ふやらう、取次何人中々の道である、長らく通つた道筋、いつ〳〵までもみなのこる、あゝかへつたか、早かつたなあ、どうやかうやといふが中々の理である、これ迄の處難儀苦勞の道を通りきた、ようが聞分けきいた、たねさへやう〳〵の事ではえんのもある、まかぬ種がはえさうな事があるか、根性のわるい話すると思ふやろ、だん〳〵に土臺を入れてかためてある、なれどあちらがゆるみ、こちらがゆるみする、四方正面鏡屋敷といふ理が明らかなれば、何かゆるまうにもこれきゝとれ、いつ〳〵の理にたの

しんでくれるやう。

△明治二十四年二月八日夜一時半神道本局招待の件
　につき相談の上押して御願

さあ〳〵今一時尋ねかやす處〳〵、はなし迄のぎりと第一の事上の理をもつて、かうといふ理と二つになる、これだけの事上さとすによつて。

△押しての御願

さあ〳〵ぜん〳〵以つて一つの事情を運ぶなら如何なる事上もさとり夜深の事上を以つて尋ねる何か萬事後々の事上を尋ねるさとしおかう、後々の事上さとし一條といふ今一時かうといふ事情勢事情の理を以て世上萬事取消すことは六かしかろなれどそのまゝほつておくがよい。

△明治二十四年二月十一日（舊正月三日）東京見合
の使者前川氏出張の御願

さあ〳〵なにか萬事日がちかづくどふいふ事も心にかゝるやろ、萬事の處どういふ事である世界中は多くの人なに程の相談定めても人間心一つの理ではをさまろまい、そこで一つ尋る尋ねるからさしづしよう一時前々の事上それ〳〵の處又々皆一つの心になつてをさめしよう、又々ぢせつ〳〵時々ふうぶん今年一つの事上といふ世上といふなにか萬事運んで一つといふ、これより精神定める、多くの中にたつた一つの理がどうもならん、多くの中にたつた一つの理がどうもならん、ふるい事情はたつてくる、今の事情ならんと思ふ、ならんやないで道にぎようさんのものがおちてある、あれもとつてこい、これも取つてこいといふやうなものや、今一時の處云ひにくい道であろ、今一時じつくりおさへてくるがよい。

△押して清水氏も出張御願

さあ〳〵一度のたいさう二名事上さあ二名〳〵。

△御教祖御社のみす中のしきものゝ御願

さあ〳〵中みすははやい中にしきをちやんとひいてざんじとい
ふ心ををさめてくれるがよい。

△明治二十四年二月十七日御神樂御面修覆御許の
御願

さあ〳〵尋る事上一寸そんじあつて破損なんどきなりとかゝれゆるそによつて。

△押して御願御頭のぢ白にとりかへましたのであり
ますか、又はそのまゝにいたしおきましたもので
ありますか

さあ〳〵まへのまゝ、十分日がきたら十分さしづひながただん〳〵の事上運びくるひながた。

△増野正兵衛の新築の宅をかりましてさして貰ひましてもよろしきでせうか御願

さあ〳〵かゝる所ずゐ分ひいそ一寸の理をもつてひつそやで。

△甘露台破損致しましたに依りつくろひにして置きましたものでありますか又更に木にてつくりたものでありませうか御願

さあ〳〵つくろひにしておくがよいでつくろいでよいで。

△上段の間五年祭につき疊表替の願

さあ〳〵みにくいといへどどうとも云はんみにくいと思へば心にかけてたれがみにくいとたつてどうせにやならんとは云はん。

△明治二十四年二月十七日教職昇級の事に付五月よりむつかしなるに付東京より今の内にのぼすものあれば昇級さするがよいと申し來りましたがこれが昇級さしましても宜敷御座いますかの御願

さあ〳〵尋る事情〳〵人々の心やで人々の心がわかろまい、これ一寸どういふ事でさき〳〵なつたらどうならう一時のぼつておかう、取つておかねばならん、一寸事上はじめ事上と事上〳〵くらべ、中一つの理おれも〳〵といふ、人々の心〳〵、心

はとめんやう、きゝわけてくれ。

△押して御願御道につくしましたその理によりてお
うじて昇しますので有りますかの御願

さあ〳〵人々の心、どういふ事でさしづわかろまい、人々の心
どういふ心もある、はこんでゐるといふかほしてもはこばん、
はこばんかほしても運んでゐる、人々の心心しだい、たつて進
める理はない、ようきゝわけておかねばならん。

△明治二十四年二月二十日（舊正月十二日）御本席
様身上御願

さあ〳〵〳〵どういふことがはじまるやらわからん、一寸
前々以てしらしておく、どうでも話おく、どういふこと話しか
けるなら、一つどうでもかうでも話しかけたらださにやならん

みにやならん、是迄埋もれて〳〵何時出ようと思ふても、出る
ことが出來ん、是から年限の事情をしらしおくから、いつの晩
何から尋ねた、身の内のづつなさ十年まつてゐる、なれど埋れ
た處、どうでもかうでも出さにやならん、第一一つまあ〳〵ど
うなりかうなりのみちは通れるものである、なれど定めた道は
むつかしい、むつかしい事を云ふとおもふな、古き事上だん
〳〵やう〳〵の道を傳へ、もうこれ五ケ年といふ一つの理にう
つりかけ、五ケ年いぜん身がせまり、目は見えず、耳は聞え
ず、よぎなく事上によつて、五年以前の道、むつかしかつたで
あらう、だん〳〵あんじた道、やう〳〵一寸の道、これからど
ういふ事始める、一年のあとゝいふは一寸の理はみえかけた、
どうもならん五ケ年といふ一つの理、としがあける、だん〳〵

の事情も定めかける、多く中日々の中、だん〳〵かけた、大半これ位と、分量定めた處、大半これくらゐと定木を定めにやならん、多く〳〵世上の道これ迄しらん〳〵といふ、それ〳〵いかなるも皆心かけ、一つ理もをさまりかけ、今年一月ふるきあたらしきといふ、年がかける、春になる、だん〳〵でようじやないか、世上遠く高い處〳〵といふ、十分運びこりて神の道をつぶしてみようかたいていの思案、とりつぎ事上、又それ〳〵一つの心、だん〳〵國々それ〳〵、一時に見せる、是迄だん〳〵聞いてゐれど、なんぞいなあといふあれ何である、あちらから印をもつてでる處々、町々のしるしをもつて出る、一年おかげ、きりなしおかげどちらの事上、處がかはつたなあと、ほか年々おかげ、まあ〳〵何でもかでも、つぶさう、とりはらう

と思へども、神一條の理は目に見えんものを拂う、一寸拂ふてもあとへちやんと理がすわりてある、これまであんじるものが多くてならなんだ、中にはどうでもかうでも、今一時の心を定められん、どうでもほそ〳〵の道をはこんだが、よく〳〵思ふて見よ、僅かの間、それから世界びしやりつぶしてから、今の事上、三年千日ともさとしてある、もう僅かの日や、何でもかでもおよぼさにやならん、又十の中、三てん四てんとふる處の道、ふかくそのば長くさとししよう、一時思ふて何もならん、遠くにもよらん、近くにもよらん、長い間えぐい道は通らん、うまい甘い道は通らうと思うても、事情理によりて通れん。何名何人あるまい、多くの中只一人よりはじまり、又それよりおくれてしまうたらどうもならん、刻限事情をもつて話しかけ

る、わからん事は尋ねるやう、皆夫々存命中の心で通れば、それだけの道を見せよう、さあしつかり、筆にかきとりて皆々にもつたへてくれるよう。

△同日夜會長様齋主遷座の御願

さあ〳〵いまの處は、何もどれもかうするいらん、一寸云はゞ學びまでのもの、修繕のもやう。さあ〳〵〳〵それでよい〳〵。

△古き社を火にもやす願

さあ〳〵すつきり掃除してしもうがよい、心をのこさず掃除してもらうがよい、掃除は先きにしてかゝつてくれ、それでよい〳〵。

△御勤するに甘露台かの御願

さあ〳〵理をしらそ、甘露臺とはどこにもない、一つの元の處地處、ところへもうごかす事はないでさあ〳〵まなび〳〵。

△夜一時におつとめの事

さあ〳〵式もなんにもいらんそこはまわりさいできたらするがよい。

△明治二十四年二月二十五日五年祭の信徒に供する竹の皮包及通常參拜人に供する辨當の願

さあ〳〵尋る事情だん〳〵〳〵事情だん〳〵〳〵事上の理、づいぶんの理であるなれどこれだけかうといふもづいぶんの理、又外々もかうといふ、これも隨分中々たいさうやで、思わく通りは

いかん、大抵日々の事情からはこんでくれ、中々屆かせんで、十分屆く様では少さいあと〳〵で何であつたぞいなあといふやうなものや。

△明治二十四年三月三日朝

さあ〳〵〳〵尋る事情〳〵〳〵、それ〴〵はこぶ處、だん〳〵心一つの事情、さき〳〵の事情、これ〳〵〳〵、又々これ〳〵どうしてくれ〳〵とは云はん、心だけ受取るのやで。

△一時山本氏の名前に約定致す事願

さあ〳〵〳〵なるよ事情、それ〴〵事情はまかせおく、心だけ受取る、むりの事情ならんといふ、事情ならん、心だけ受取るのやで。

△明治二十四年三月四日御教祖様御霊璽御遷座神殿の東の方か、北の上段の間かへ願度伺

さあ〳〵尋ねる事情、まあ〳〵あちらへ出ばらうか、こちらへ出ばらうかといふ處、もう出ばらいでもよいで、なれど一寸には一日の日をあらためて、世上には五年祭といふ理をもつてあつまる處、一寸でようと思へば古い處へ、一寸事情ををさめてくれ、不都合と思へば出いでもよいで。

△祭式の場

さあ〳〵その日のまつり、その日の事情受取る處事上はふるき處で受取る。

△普通參拜人へ餅を廢すること

さあ〳〵二三てんの事情、とどこまい〳〵、御供としてすれば

信者だけにしてあとはそれ〳〵運ぶ處、御供としてやるのは信者丈でよいで、何をしてもとどかせん、隅から隅まで屆かん、屆かんのがたのしみ。

△祭式初日は北の上段の間にして、後二日は甘露台の場所にて御許願

さあ〳〵一日によつてあとはかつてにおもう樣にするがよいで。

△明治二十四年三月四日梶本みち障りに付御願

さあ〳〵小人の處、身の處心得ん事情治まるに治まらん、内々に一つ事情何かの處心得、是迄の處ふるき處はなしてある、今の處不都合であらう、治まるかと思へばまた一つといふ、古き〳〵さとしたる處、もう少し治まりかけたなれど今すこしの處

治まらん、よう聞き分け、さしづの違はんやろ、内々へも十分話してくれ、又一つには眞柱ちやんと治まつてある、又一つと家内一同引よせるといふたる處、又一つには内々の處にてきにかゝる處、よう思案せよ、病んで果たす事情もある、どんな事ではたすもある、まあ〳〵今一時の處おだやか程ようの理を運んでくれるがよい、何かの事も治めてくるがよい。

△明治二十四年三月六日神樂御勤の場所の願

さあ〳〵尋る處神樂づとめ、何時もの通り、一寸でこしといるふつごう〳〵でない、いつもの處でなにも心にかけることはいらん、ぜん〳〵はなしたる、十分のやしろをつくりわけ。事上中みづはやいあす一日の日、一寸出こしたるだけどうしてくれかうしてくれ云はん、式といふいつもの處でをさめてくれ、心

おきなうするがよい。

△明治二十四年三月十日御本席様身上願

さあ〳〵尋る事情運ぶ事情一つのふしぎ、ぜん〳〵よりもはこびいかなる道も早くといふかゝり一つの理、どうなるおもひ〳〵の理ではをさまろまい、皆一年一つの理に運び思わく通りによかつたなあ、處々でもいさみ先もいさみ、心實定めてするなら、皆この通り、それ〴〵も誠一つの理なくば尋ねる理はない。さとし自由用といふ、これまでよりも席といふて皆運ぶ心は受取る、席といふ諭しは、天の理、三日事上の理をみて、何日の事上もをさめてくれるやう、互々の心もをさめるやう。

註、三日の事情といふは、五年祭の三日間晴天にて、前後は雨天なり。

△明治二十四年三月二十五日（舊二月十七日）同村

北村平四郎地所の件

さあ〳〵事情前々もつて指圖、ぜん〳〵話、ぜん〳〵まかせおいたる、ならん事情はならん、なる事情から多くひろまる、四方八方心おきなう治めしきつて、どうとおだやか治めくれるなら治める、一時どういふ心にもたず、長らく心をもつてさしづ通り。

△當教會一等教會に昇級御願

さあ〳〵ながの處小い處から昇つて來た、どうせにやならんと云はん、多くの事情はかつて第一云ふまでやない、つい〳〵一處へあつめてしもうで、一寸のかゝり事情八方一處へあつめてしもうで、これようきいておけ。

△御本席様東京へ御越に付御許願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵一寸ゆるそ、しゆんを見て一度ゆるそ、皆談じ合ひ運ぶ一つの理ゆるそ。

△押しておきかせあり

さあ〳〵だん〳〵事情、十分ひいそ〳〵いつのきであつたかいなあ、十分ひつそ事情はこべ、順序しづか〳〵、何時なりとゆるそ。

△遠州へ御立寄の願

さあ〳〵とりあつかひにまかせおく。

△明治二十四年三月二十八日飯降おさと身上御願

さあ〳〵身の處尋る、どういふものであらう、なにか事情であるのか、あと〳〵を思へ、不足やない、あと〳〵を思へ、あんじるやない、案じては理がまはる、案じるやないあと〳〵を思へ、ならん心にたんのふ、日にたんのふ、日に事情たつ事情、これをたんのふと心にをさめ、あんじるやない、これだけをさとしおこう。

△明治二十四年三月二十八日御本席様なり教長様出

京の御願

さあ〳〵一度の理はゆるしたる、席一條の理、これもゆるしたる、それ〳〵通ぶ事情、せき一度の理を以つて席一條たちこす事情、早々の事情より一つの理、なるならん事情は、なか〳〵一つの理、三名なら三名、四名なら四名ゆるそ、何か萬事はこぶ事情、よのぎほかのぎはならんで、これをようしつかりいふておけ、理が違へばなんどきどないになるやしれ

ん。

△おして

さあ〳〵尋ねかやしたる處、又事情改めて一つ、さあ〳〵咄々たつて一つまあもう心得〳〵〳〵、よう事情心得おかねばならん、どういふことであらう、これだけ〳〵の事なら事情おもふであらう、事情きゝわけ、事情になんどの事情もある、一代一度の事情あすよりつれてたつ處、どんな事情あれど、いかん〳〵と日をきらず、いつかほんにきいておれば、なんでもない、ようきゝわけばわかるであらう。

△御出京の際本局へ事情運ぶの願

さあ〳〵ついでを以つて一つかうといふ〳〵尋る、つくす一つはこぶ一つ、その日に一つ、一日萬事それよりすぐと引もどす、さあ〳〵一度の指圖はちがやせん、だん〳〵の事情それ〴〵なるほど隨分の理であつて、事情によつてきゝわけ、一時はこぶ事情はこんでくれるがよい。

さあ〳〵尋ねる處、尋ねかやせば、だん〳〵〳〵の事情の理を以つて、一つさしづ、ぜん〳〵の事情おさへてくれ、尋ねかやせばならんとは云はん、生涯一度一名一人の事情。

さあ〳〵一人別に通するがよい、その事情ならすみやかたいさうにおもふなよ、大層におもふてくれたら、どうもならんで。

△明治二十四年四月十日御本席晝飯後御障りあり御伺の處

さあ〳〵この處、この處せい水一條、もう水といふせい水

の水をさづけよう。

△押してこの處へでありますか上原氏への授けでありますか

さあ〳〵水をさづけおく。

△明治二十四年四月十日東分教會役員秋田縣へ出張の御願引續いての御話（上原氏）

また一つでこした處、地所といふ水といへばせい水、代々かはれど、重々の理に授けてあるのやで。

△押して渡し方を御伺

さあ〳〵わたす處、今一時の處は一人の理に、日日はこんでくれ、生涯の理に授けてあるのやで。

△明治二十四年四月十四日東分教會より秋田縣へ派出の御願（赤尾、千田氏）

さあ〳〵まあ遠く處、なか〳〵の理一寸のかゝり、なか〳〵むつかしいやうである、一寸かゝりかけた處、おやがついているで、神が守護するで、尋る事情を以つてすればどんな事もみなをさめてみせるで、便りとして尋ばさしづする、さしづの理を以つてすれば、なにもあんじる事がない、心おきなう行てをさめてやつてくれ。

△明治二十四年四月十日御本席樣東京より御歸會の御願

さあ〳〵だん〳〵じゆん〳〵の理をもつて長々の道中處へ重々の理まんぞく、席順序生涯滿足、日々の自由用これ一つ、如何

なるものも心通り、何時々々までも話しの臺、席に順序たんのふ十分うけとりたで。

△明治二十四年四月十五日玉惠樣身上御障に付事情

御願

さあ〳〵なによの處、尋ねかける事情、尋ねかけば一つ話、身の内の事情あれば、思案するであらう、だんじるであらう、今日事情をさまれば身上治まる、事情尋ねにやわからん、尋ねば自由用自在の話、これよりこれから事情まで尋る、事情聞いて心定、當分の事情きいて生涯の事情までさとるやう、一寸暫くの事情は世界あぶなきこわき道の事情とほして事情はなしかける。これより萬事心定めるなら、日々といふ事情は尋ねにやならん、事情以て日々といへばをさまらにやならん、一どきに

話、事情どうもならん、たれ〳〵それ〳〵はこふ處は受取る、さあ〳〵事情はそれ〳〵理はきこえるであらう、國々處多くの中、どういふ事、かういふ事遠くの事、それ事情通りてきたる道、これよりさきの道でる、道となしてきた、道通ればどれからきいてもどれから見てもなるほどとまんぞく、あたへわづかの道、あつちこちらの道、遠く來たる、なに一つ不足なし、萬足一半月事情、心の理を以つて通れば世界一時にをさまる、又月々事情身上わかき事情にどふいふ事であらう、身のをさまる處ははなし通りしつかりきかしてくれるやう。

△明治二十四年四月十八日日本橋支敎會々長中台勘藏氏身上御願

さあ〳〵身上の處に心得ん、事情といふ、どふいふ事情と思

ふ、咄は長い、一つ〳〵の理を筆にとめてくれ、始め〳〵て一つの事情、第一事情なるならん事情、いふまでやあろまい、如何なるも運び、一つ事情何かの理元一つの理運ぶ處は十分の理うけとり、今一時どういう事情とおもふ處、元々ならん處をさめた處、又一つは分教會支教會といふ二つの理と思へども、元は一つ初めは一つの理である、今一時分教會の一つの理をさめる、又支教會の理ををさめると思へども、皆同じ事情、いつ〳〵迄も皆一つの事情、元々一つの理であらう、今一時身の處心得ん處、ぢき〳〵の理をきかした事はない、すぐ〳〵の理はまだきかさん、ようきゝわけ、支教會といへば道のをさめ方によつて支教會といふなれど一つの理は分教會といふ、一つの理深きの理といふ、どちらもわかい、こちらもわかい、どちら

も親といふ理を以つてわすれてはならん、何よの理もをさまる、元々をさめた理はわすれてはならん、忘れさしてはならん、まあ二つの事情を一つの理にをさめてくれば、なんでもかでも其だけの効能、どちらも十分の道であらう、十分の世界であらう。

△明治二十四年四月二十日上田奈良糸身上事情御願

さあ〳〵尋る〳〵〳〵尋る事は一もあらせん、尋るまでのもの、この道何處からの道、思案神はどうせにやならんかうせにやならんとはいはん、理を聞いて成したる道なんでいづんである、なにが間違ふ、人々心めん〳〵の心なに程やらうと思ふても、いやといへばどうもならん、日々やろまいといふても、つくす理によつてあたへる、一つ理がかはる、どうでも忘れられ

ん、これ一つからどうでものかん、だれがどうする、あれがどうするなにほどつくしてもどうもならん、多くの中たれ〳〵とをさめにくい、ようこそといふ理はをさまる、何程どうしてもやりたいと思へどもまちがうをもつめる理、代々一代たちきたる、あやぶき一つ、それより洗ひかへきゝわけ、此の道といふこれはかはりた道といへまい、一つ〳〵の理をさとして理ををさめて、いつ〳〵までかんなんの道通れといふのやない、それ〳〵深き中いんねんの理をよせてはたらき、これようきゝとりてさとしてくれねばならん。

△明治二十四年四月二十五日本局本會議につき教長様出頭致すにより御願

さあ〳〵尋ねる事情〳〵、まあ一時の事情、追々咄どういふ事もかういふ事も、それ〳〵ふとき心はいらん、事情はそれ〳〵ある、ふとき事情はいらん、おほぼう一つ又一つしんばしらでこす處、すみやかといへば一つ、ならんといへば一つ、さあ〳〵たより〳〵といふ理なりてある、たよりといふは一つ深き事情、ながらくの間にきかしてある、十分心をもちふとき心はいらん、ぜん〳〵事情運ぶ、日限の事情一日二日事情心にをさめてそれ〳〵一つねがふがよい。

△出越す處御許下されたく押して御願

さあ〳〵出越處ゆるす〳〵ぜん〳〵一日二日といふはその時〳〵の事情尋ねといふやない、それよりまい二日ぜん出立はまづ〳〵二日ぜんでよいあひだの日はいらんによつて。

△三人御隨行事情御願

さあ〳〵いづれ〳〵どうでも一人でならん、二名三名ははこばにやならん、一日二日ぜんになつて尋るがよい。

△明治二十四年四月二十七日玉惠樣齒の痛みに就い
て身上願

さあ〳〵身の處〳〵事情は一つ身のさしづ事情身のさしづどういふ事情と思ふ、どうおもふてはならん、身の處一時たへられん、何かの處もどういふ事で、まづ〳〵よふねんの事情ならば身の處さほど事情はなけにやわからん、事情は前より諭したるさき〴〵萬事一世界一つ思ふ一時さとし、暫くと云へば暫、今といふは今、どういふ事もかういふ事も尋ね一條、一時一つの理をはかりかけるなら理によつて、生涯の理をさとす、かはら

んが誠かはりたぶにはどうもならん、をさめ一條日々萬事尋一條、これ一つの理にさとるなら、ぜんよりも自由用といふ、わかる理によつて心通り、何よの事するも内々、地場どういふことも尋ね一條さしづ一條、皆それなり〳〵といふ理にわかれば皆をさまる、又一つはじめる、これまでといふ長い間の事情まあ一寸にはいつの事情と思ふ、事情刻限なれどみの處よりあちらこちらぢめん一つやしき一條どうなりかうなりといふ、まあ一だんあちらもらもひろげ、こちらもさし出し、何か萬事とりまぜ一つ事情ようきゝわけ、あちらもかりや、こちらもかりやしたと思へば、とりはらへ、萬事尋る事情を以て運ばにやならん、人間事情では一時をさまろまい、さしづ一つの事情、しん〳〵だん〳〵一つの理をはなしかけるゆえ、理をもたたず尋ね

一條よりをさめきた道とどいふようきゝとつてくれるやう。

△明治二十四年四月二十七日御本席様戸主の名前政

甚様へ切替への願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵もう身の處すつきり、かまはんやう、すつきり心にかゝらんやう、一時すつきり改めかへ、何も知らん、何も思はんやう、尋ね一條の外思はず思はさぬやう、日々の處用向事情、席をつとめる心にかゝる事あつてはどうもならん、三名一席よぎなき事情はつとめる、これはゆるしてある、縁談事情ふしん事情ひつそ〳〵願一人かきとり一人二人の事情にさだめおかう。

さあ〳〵かやしておくで、願一人かきとり一人、これようきゝとりておけ。

さあ〳〵おもて事情はすつきり〳〵何もおもはぬやう、おもはさぬやう、このおもはさぬやうにするのがむつかしい、さあす日よりすつきり。

△明治二十四年四月二十九日日々事情を以て本席様へ願に出る處願人一人尋出一人の指圖の處願て貰う人達てださして貰ましたものはそれはなりませんものかの事情御願

さあ〳〵事情尋ねかやす處〳〵、尋ねる一條の理、身の處さわり一つには方がく、又はるんだん、身上事情尋ねでる處、たいてい見わける、一度のさしづ一度の事情縁談ふしぎみんなそれにはなしの事情でわかるやうになれど、どうでも一どふなあといふ事情はこべばゆるさう、いつまではどうもならん、かうし

てゆるそ、かうしてさわりない處からどこまでわかりがたない事情尋ね一條さとしは中々の事情でない指圖にまちがふやうな事はない、さぐりの理によつてまちがふ、願人一度一人それ〳〵事情によつてゆるそ、なんどの事情さとれどどうもならん、日をたてばたれも〳〵といふてどうもならん、尋ねさしづの事情はあちらのはなしこちらのはなし一つの理に、いく人の事情になる、だん〳〵はなし合うてよくきかねばならん。

△明治二十四年四月二十三日寺田半兵衛娘こう十九
才なるものせきいで又孫眞之介六才眼病に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵身の處にて心得んといふ、心得ん事情それ〴〵心得んといふはどういふ事であらう、身上事情身の處どういふ事であらうかならずあんじることはいらん、すつきりあ

んじやう、さあ〳〵一つ話しよう、咄しといふはどういふことであらう、あんじんといふはどういふことであらう、さあ〳〵ぜん〳〵一つ又一つなんにもあんじる事はいらん、一つ理をさとしう、どういふ理を以つてさとす、一寸の理ではわかろまい、ふかきの事情ある、一人の處にせく事情ある、せく事情一つありて一つどういふものであつてかゝる、よくはなしきゝわけ、一人の事情といふはどこへどうしてかしこへどうする身上をさまりたら、はなさにやならん事情ある、これだけさとすによつて。

△明治二十四年四月二十三日河内國守口にて説教所
御願

さあ〳〵一つ尋る事情、處々にてはこぶつくす、一つの事情に

よつてかうといふ、それからそれの事情、何時なりとゆるし、重々の理を以てすぐとかゝるがよい。

△明治二十四年四月二十三日林大吉はこぶ事情の願

さあ〳〵事情尋ねる、尋るは一つの指圖、心丈の事情はこばれるだけ、それ〳〵だん〳〵事情處々事情、いかなる事いりこみ心だけすみやか運ぶやう、重々速かをさめてくれるやう。

△明治二十四年五月二日本局へ代理の願

さあ〳〵一時立越す處、事情はどういふ事情、さあ〳〵まあ一時の處代理を以つてつかはすがよい、代理を以てはこびかけるがよい。

さあ〳〵立つ處をねがふ、一時といふなにもべつにせいてどうせんならんやない、せいて一つ事情を運びかけるやない、他の

處では出てどう話を聞いて、今の一時はどうもならん、めん〳〵かうせにやいかんそも〳〵、めん〳〵一時勝手の理をあつめてゐる、かつて理は一寸にはいかん、代理を以つてのぼる、どういふ理を立てる事はいらん、なんでもといふ事情はいらん、おふぼふ一つの理を以つて、これよう聞いておかねばならん、尋ねて今からといへば立つ處心おきなう、大丈夫にたつがよい。

△明治二十四年五月二日御本席様身上御障りにつき御願

さあ〳〵身上に一寸不足なる、不足なればどういふ事であらうと皆思ふ、尋ねば一つの指圖、もう事情といふてむづかしいことは咄しかけた處がひくやない、むつかしいことをいふて咄し

かけると、あんじる身上から、尋ねかけるから一つのはなし、みなそれ〴〵聞て一つ心を持たねばならん、身上不足なるとはどういふ事、これまでだん〴〵つたへたる、席順序むつかしい、なんでもなきむつかしい理は一つでいくへの理もある、その理がむつかしい、ぜん〴〵に席事情、遠く一度つれてとほりた道といふ、つれて通つた中をさまる日までの道にいかなるふしぎ一つのかうがありたが、どんな事もさしづといふ、ようきいておけ、あゝふしぎであつたなあといふさしづといふ、指圖をもつて運べは自由用といふ、大きい理や、自由用きゝとりてといふての話、ようきゝ、わけんければならん、前々にもあんな話も聞いたがその道はまだかいなあといふ、すみやかはれん、年代の道をいふたらさしづといふ、事情を以つてさしづの理を

受けて、又々道ひらけるとおもはれん、一寸わかりかねる、身の處不足なる、くどうはなしつたへてある、身の治まりといふ處ようきゝ、わけて、さあ〴〵何程遠くの處といへど、へんじようといへど心あればだん〴〵をさまる、日々といふ又一つには世上に道がありて道をつたふ、心ありて心をさめる、指圖を尋ねばまちがふやうな指圖はせんで、なれど聞きやう取りやうさとしやうによつて、みな〴〵まちがふである、助け一條ならかういふ理で萬事心によせて萬事さとりくれるやう。

△明治二十四年五月五日御本席様身上の障りに付御願

さあ〴〵身の處にておもひがけない身のさわり、どういふものとかういふものと、十分の理を聞いてをさまつてゐる、中にさあ〴〵どうもならん事情がある、どういふ事情ならまあ皆々よ

りくる中つくす中、互々はおもて一つの理、中に一つ又中に一つどうもならん、どれだけの一きとうぜんでもきいてをらねばならん、たつてからなんであつたなあといふやうではどうもならん、心といふ理はつゝんである、理もおもてにでる理もある、一時腹の中とんとわからん、そこで身の處のさわり、腹がせつない、だん〳〵ととりなほし、どんな理も心に持たず、神一條の道をよう聞わけ、是迄通りきた道、何ほどむつかしい道でも通り來た、なんでもかでもとほらにやならん、とほさにやならん、あぶなき事情でも遂には理にをさまる、なるほどの理をときてをさまつてきた、如何程うつたとてきつたとて、なんにもならん、そんな事位でおされるやうな事ではこの道はたゝん、ないでもない事だん〳〵日柄も來て、刻限事情を以てさと

さにやならん事もある、刻限一つの理をきゝわけ、あら〳〵きゝわけんことには始められん、一寸聞いておけばめん〳〵事情の理によつて心にかけてゐるやらう、何でもなき理がわかりがたない、をさめてゐるも心の理におもう、なんでもない理が、かたい〳〵とおもふ理はやりこい、さあでかけるなんど〳〵なる程のもの神の理と心の理ところりと相違する、身上にどれ丈の事情ありても、あんじる事はない、内々の理が二つになつてある、をさまらんといへばあんじる、是迄眞實ふかき因縁を以つてよりくる處、日々運ぶ處十分受取つてある、互々の心をしつかりむすんでくれるやう。

△明治二十四年五月八日夜御本席様御身上おさわり
に付御願

さあ〳〵身上〳〵〳〵身上一つどういふ事であらう、話一の理を聞け、事情どういふ事指圖から話、それ〴〵傳へ、わかる理もわからん理もあるやらう、指圖通よりどんな事したてをさまらん、話するほつとうかんで話する、むつかしい事は云はん、山々話ある、めん〳〵心の理で指圖の理がぢやまになる事もある、世界といふ多くの中ならんから一つの道はじめかけたる、ぜん〳〵事情にさとしたる、三年といふ千日と云ふ三年の日が立つまでは一寸むつかし、なれど三年の日がらたてば、一つにあつめてしまふ、どうして集める、いんねんの道から入込んであちらへこちらへきくみれば、理があれば道がつたはらにやならうまい、道から道を通るなら、むつかしい事はない、日々の事情はじまつた道、今一時世上世界どうり、上の道二つの理ある、元々はこぶ道太勢の中、なんめい〳〵いひかける、話がかはる、さしづより外に理はなきもの、むつかしい中でもさしづの理でとほる、人間といふはその日〳〵の道しかない、神がつけた道はころつとかはつた道、よほど年限たつた、おひ〳〵の心をよせばふあんなかからよかつたなあとこれまで通り來た一時一寸話〳〵、おうぼうの心の理で、なんでも人にも云へん、人にもみせられん、み通した神の道世界の道理で暫々いふたる、道世界へだてる、で、來る道これまでなり來たる道は神の理、どんなことするも第一屋敷の道ぢば一つの道、尋ねて指圖、今迄運びかけた道、皆思ふやうなつてある、大もうといふ事情も

みなをさまり來た、勝手いふてはどうもならん、勝手といふは人間心の道であるから、一寸にはよいなれどいつ〳〵までもをさまらん、何をしたのやなあといふ、これでむつかしい、たとへなはを引くくひを打つといへど、尋ね、さしづ通りたづねば隨分の理にみてさしづする事もある、ならん道もをしての道はつゞかん、何かの事も聞分けてくれ、どうなりかうなりの道さへをさまれば、世界さき〳〵の道は一つもいらん、萬事一つの理によせてはなしおく、これだけよう聞いておけ。

△明治二十四年五月九日夜十一時半刻限の御話

さあ〳〵一寸刻限にしらすで〳〵、どういふ事しらすなら、ねんぶんのとしを知らす、これから珍らしい事を云ひかける、さあ〳〵これまで今年といふ長い年限の内、どういふ事も見る、

如何なる道もとう〳〵來た、早く書取れ〳〵、さあ〳〵道といふ道が世界といふ、これから〳〵どういふ事も一日〳〵しらす、早く知らさにやならん、眞實話する事できん、尋ね〳〵身の處をしらす、身の内が障るどうもならん、一日をくれ又をくれだん〳〵をくれる、身の内速かなれば何時でも運ぶ、さわりあつては入込んでさとす事出來ん、席といふ事情聞きわけ、なんでもないと思ふてゐる、是迄自由用にいふ理は、幾重にもといてあるなれど、きゝやう取りやうに、どんな理聞いても思案〳〵だけではどうもならん、是迄説いて來たる道、あぶなき道も樂しい道も説いてある、あぶないむつかしい中に樂しみなけりやならうまい、是迄の理は指圖の理を以て連れて通つたから通れた、なれどめん〳〵の心の理で通るなら通つて見よ、又一

つ遠くより運び事情、席々といふてはじめかけた事情、内々一つ事情はあるまい、世上どんな事いひつけるとも、おめもおそれはない、諭したる道は通らにやならん、連れて通るから通れる、どれだけ遠くと雖、自由用と理は十分つけてある、年がよつて弱くて苦しいといふ中には大切や〳〵と事情は云はにやなろまい、大切の事情がわからん、榮よ榮華といふ理だけでおもふやうにならん、思ふ様にさとされん、毎日日々事情が近よる、どんな道が始まるとも何時はつしるともわからん、身上の處又さわり〳〵わからん〳〵で身上もわからん、この話早くさとしたいなれど、ぢやまになるものがありてどうもならん、運ぶ力の理がないからどうもならん、だんじの談つたへてくれるやう、内々にも如何なるもたんのふ早くをさめにやなろまい、

へんじようの處、はあといふ思案わからうまい、そこで刻限事情を以つてさとしおくといふ。

△明治二十四年五月十日先の御指圖に基き心得の爲め御願

さあ〳〵もうどうも事情〳〵、刻限事情といふはおくり〳〵ての刻限事情どんな事でもそれ〴〵だん〳〵尋ね、だん〳〵ふしようわからん間によつてどんな事もさき〴〵尋ね出でねばならん、どんな事であつたなあといふやうではどうもしようない、人間心では通れやせん、これから勝手の事情でおくれん、始めて一つの事情、これまでなき道をひらく、是迄さとしある、是から聞分け、一寸したこんな事この位の事、心それ〴〵わからん〳〵の間やからそのまゝゆるしてある、これからだん〳〵事

情を以つてなんでもかたく世界一つゆるし一つの理を以つて通ればあらふ事はない、道が弘くなる地場ひろく道はなる、神の一つの道からみなきゝとりて自由用といふ、人間の心理ではさらく〳〵あろまい、これからなんでも尋る事情を通るなら一寸も違ふ事はさら〳〵ない、なんたる事情通つたであらう、ぜん〳〵さとしたる道は通らにやならん、この理は通さにやならん、勝手の理通つて、因縁といふこれからをさめさす、むつかしい事である、皆心の理をよせるなら、ながくとは云はん、早くみせたい又世界の理、内々地場一つの理はなんでも通さにやなろまい、先々の事情たのしみ事情、これ一つきゝわけてくれねばわかりがたない。

△押して御願

さあ〳〵どうもじやまになつてならんといふ事情聞分け、どんな事も今迄は皆見ゆるしてあるといふは、先きにもさとしたる、これからはだん〳〵一つさしづよりの道よりたゝせんで、おれが〳〵といふは薄紙張つてあるやうなもの、さきは見えてみえん、何程の事情一つ事情一つの理も心にをさめにやなろまい、さしづの理ははづれんかどういふ事しらす〳〵、尋ねかけて一つの理はぢやまになる、事情聞分け、神がじつとしていたら世界からよりきてもどうもなろまい、どういふものであらうかといふだけの事やで。

△明治二十四年五月十日教長様御居宅新築の御願

さあ〳〵〳〵それ〳〵心にかゝる〳〵處、又一つには又だんじ

をもつて一同の心得一つの事情又さしづを尋にでる處、ふしんといふゐたくといふ事情はかりにゆるす、かり家でゆるす、中に思惑通りにはいかんばふだけことかけといふ、本普請のしゆんが來れば、すつきり取拂ふてしまう、一時にかゝる是はまだ一寸にはいかん、今尋る處ほんのかりにして、しんびやうの事情、どつこへなりとなをせるやう、この心なけりやかゝれん、はんぱともおもはず當分の事かけ、一間二間三間それ〳〵かるく、さあ〳〵何時もやう一時しゆんがくれば一時かゝりかけ、一時すつきりと取拂ひ、其よりはじめる、あちらへなをしなりともおしいといふやうな事をせず處々かけだしてある、もうこれといふしゆんがきたら一時すつきり取拂ふから、ほんの一寸のかゝり、何時でも地場はどこなりとゆるす、本普請まだ一寸

にはいかん、何時とりてもおしいとも大層とも思はぬやう、それ〳〵此處がよかろとだんじの理を以つて、又一つ尋ね、さあ勇んで一つかゝつてくれるがよい。

△明治二十四年五月十日永尾楢二郎目の障に付御願

さあ〳〵身の處、第一事情一の事情、よく聞きとりて前々一寸の話とりまぜはなしさとしてある、日々暮らす一つ是より暫く〳〵一つの心で樂しんで日日といふ、よくきゝ取りてあちらこちら二つの心をさめてくれねばならん、長くでない暫く年々の事情、あんじなき事情によつてさとさう。

△明治二十四年五月十三日山澤氏子供三人共身上に付御願

さあ〳〵小人〳〵事情、身上の障みんなかはりて障、一つには

どういふ事、ぜん一つの理はいつ〳〵事情身上にかはりて一つどういふ事あんぜる事はいらん、何か事上〳〵あればこそ尋るさとさにやならん、よく聞取れ、きゝとりどういふ事かういふ事、先々事情はそれ因縁や〳〵きくといふてをさめきたる、いろ〳〵おもふ處よき時におもふ處、よのぎほかのぎはいらん、おもふやない、より來る處世界兄弟、世界一時の兄弟ととつてはまちがふ、地場によりくるしんの兄弟、いんねんの上の深き因縁、この事情きゝわけ、だん〳〵にひろくなれば廣くなる、世上にうつる、因縁の因縁はしんの深き因縁〳〵一つの理に親の事情もつて一つの理、むつかし様で何でもなき、めん〳〵の小供の親あつて子、兄弟の理をとめて不自由艱難いらん、身の不自由なき事情、親一つの理子の理よりくる理、兄弟何も不足

もあろまい、鏡屋敷地場へ生えるなに程といふは鏡屋敷くもりなき理は鏡、内々萬事眞柱に一つ〳〵互々咄し合ひ、古き因縁如何なる事もきゝわけてくれるやう。

△明治二十四年五月十日神道管長天機伺、露國皇太子御見舞のため御出發に付京都迄會長様出迎の御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、尋る事情ちよつとには心得、十分心得て〳〵心にかゝる事情、一つ隨分心得て〳〵、今一時一寸なろまい〳〵立よる〳〵、十分何か心得て行かにやならんで。

△おして御願

さあ〳〵隨分事情は何かの處、心得て運ぶ處、世界の事情はこばにやなろまい、立よる處心得て一時の處はゆるす。

△會長様隨行増野梅谷永尾御願

さあ〳〵一人二人の事情尋る事情どうでも一人二人三人とも一つの事情、互々何かの處も萬事心得にやならん一時の事情大きい事情、どういふ事上これまで一時の事情は皆しらしおいたる、へんじよどれだけかたいといふ世界何かの處もせまりてきた、千日〳〵といふ事情は皆心得にやならん、むつかしい〳〵といへばあんじる、案じる事はいらんで、心得て勇んで〳〵案じる事はいらんで。

△明治二十四年五月十五日夜十一時二十五分御本席

様身上につき刻限

さあ〳〵やれ〳〵さあ〳〵何が云ひかけるやらわからん、さあ〳〵えらい道がでかけた、さあ〳〵一寸ならなにもしらん、しらんものがなにもしらん、さあ〳〵何をはじめるともわからん、さあ〳〵これまで通り來る道どうなりかうなり世界のはしくれ、あちらの木がゆら〳〵、こちらの木がゆら〳〵、なんにもわからん、しらせんものが出這入りしてゐた、一寸の事情一寸のとばしりが出かけた、このものあのもの一寸とばしり、どこまでもうろ〳〵、あちらへうろ〳〵してゐる、どんな事が始めるやらこんな事おろかな事、風がふくやら、神なら神だけとばしりだけの事、さあ〳〵道をはじめかけたら、おひ〳〵道が始まる、いつも春は春、春のやうに思ふてゐてはころりと違ふ、花の咲くやうにおもふてゐるからわからせん、どこからどんな風ふくやら、雨がふるやらしれやせん、何のたのしみもありやせん、一寸とばしりもかゝる、これがわからん、花の咲く

しゆんなんぼどうしたてしゆんがこにやさきはせん、風がふく雨と天氣とまつけれど、大風だけはどんなものでもまたん、あぶなき道があるからちやんときかしてある、どんな事みるやら聞くやらあんじてばかりゐる、又一つの咄してきかす、何をいふてもみな道、道の話、それ〳〵どうもとばしりだけでもおどろく、何時どんな事、みるやら聞くやらわからせん、内々だけの心得事情あるやろ、どれだけ心持つたとて、どこに聞かすやない、いふのやない、これをとどめてもつておかにやならんときいておけ。

△明治二十四年五月十六日午前九時御本席御身上障りに付御願

さあ〳〵つゝいて話かけたる事がある、どういふ事を話、これまで聞いたる事や、聞いてあつて刻限にはづれるやない、皆々おくれるのや、第一の理を話したる刻限の理に話したる事はづれるやない、おくれるのや、第一事情皆ほのかの理になる、刻限の話、めん〳〵のおもいにわすれる、そこでおくれてどうもならん、今の處は二つある、一つの道はおもての道、一つの理は心の道や、表の道一寸の道や、心の道は違はしてはどうもならん、わからんから皆許してある事を、どんな事であつたやらなあ、みなゆるしてあるからおくれてどんならん、むねの道あればこそ是迄通りて來た、これをよう聞いておかねばならん、世界道といふものは、とんと便りにならん、しつかりしたやうでふわ〳〵してある、世界の道に力を入れると胸の道は薄くなる、そこで皆もどりたらこの理をきかしておかねばなら

ん、どうもならん、胸の道は神の道やで、一つに心をよせておかねばならん、是迄刻限話といへば、なんやはやり歌のやうに思ふて、あちらへこちらへいふたぶに、是迄刻限咄しといふたらなにをいふやいなあとしもふてある、つい月日が立てば忘れてなにやいなあ〳〵いふてしもふてある、それではどんならんで、これ胸の道が第一やでしつかり聞ておかねばならん、だいじの刻限の道やで。

△明治二十四年五月十八日夜十一時刻限のおはなし

さあ〳〵〳〵〳〵とういで〳〵咄しは遠いで〳〵遠い處の話や〳〵、どんな遠い處からはる〴〵の道、はる〴〵のさと、やう〳〵の日が近づく出て來た、ひろい〳〵理といふて出て來た、國といふ處だん〳〵わたり、日本國といふたら大變小さいといへど、土地さとよく〳〵の事情かゝるや否やの道があつて、遠い事情より、遙々の道、これまでかたき〳〵のそのかたき、なんでも思ひ〳〵の道があれど、われかおれかの中に一ついろ〳〵の道、いろ〳〵の理から一寸事情一時ならんどうでもかうでもならん、むら雲の中にどんならんものがある、よる〳〵といふなにほど遠くといへど、心といふ理は同じ理、其の塲の深き話、是れまでだん〳〵といた話は長い話、くどい話、今といふて今には分ようまいなれどじせつ一日といふ日をようきゝわけ、年限の道といふは一日の日に始まる、一寸しばらくといふまあかすかの事なら、やれ〳〵事情治まれば時節といふ理がある、時節とはなした理は出にやならん、古き話年限はわからうまい、世界中どんな道もある、わからん〳〵の中に心の理があ

る、心の理によりてよせる、心の理は一ぱん一つといふなれど、いくへの理もある、一寸の話にはできようまい、一日の日や〳〵と一寸話かけたる、一日の日といふは大きい話、ぜん〳〵よりさとしたる、どんな道がありてもおめもをそれるやない、是迄にもさとしてある、内々胸のしあんが第一、どうでもかうでもつれて通にやならん、ふんばらにやならんといふ理でうごかん、今一時の處もう〳〵身がせまる、身がせまるやない、世界がせまるからみなよせる、一てんの理をみせる、如何なるもみえてくる、うつかりしていられん、そこで身に障あちらの事情がはしり、身上がせまる、身がせまるやないで世界の理がせまる、どんな道が見えてもあんじる事はない、おそれるも心あんじるも心いさむも心みな〳〵の心をよせてよく聞いて

おかねばならん、つゝみ〳〵て胸の内、遠くいかなるも心一つの道、心一つの理をめん〳〵一時いふ、どんな事があつてもへんじよではどんなんぎが起るやらしれん、皆承知していれば、其の日が來てもほんにあの事情かと、心にたのしむ、一ぱしどういふ事情になるとも、日本一つの理がある、かうがある神一條といふてある、わからんやあろまい、あんじる事はいらん、天より始めて一つの道ををさめるといふ。

△明治二十四年五月二十一日梶本松二郎氏身上願

さあ〳〵身上から尋ねる處〳〵、どういふ事であらうとおもふ、思ふ處尋ねにやしれまい、尋ばさとさにやならん、さとした理はなけにやならうまい、話し事情さとする、これまでだん〳〵にさとしてある、さとした通りといふは一寸初まつてあら

う、古き事情に間違はあらうまい、古きさとしたる事情には、いつの事であらうと、思々の年をとり、古き處の事情に間違あろまい、此の理から内々きゝわけてよう事情きかさにやならん、内々おなじ兄弟、兄弟の中に一時事情はそのまゝといふ、尋るからはいろ〳〵のさとししよう、これよう先づ話、どういふ事情さきの話なら内々事情一寸の處はどうであらうと思ふ、それ〴〵萬事あちらへはこび、こちらへはこび、とんと樂しみの中にめん〳〵心といふ事情ある、追々の話する、今日一日はあら〳〵の話、小供〳〵〳〵といふひきうけといふてある處、ひき受けといふはいつごとやとおもふ、どうでもかうでもなりてくる、先の案じはいろまいよう聞分け、身に一つ又候〳〵身の障どうであらう、暫くといふてあらう、おもはくなれど又候〳〵、今一時話一つ同じ兄弟、世界も一つの兄弟なれど、此地塲一つといふは、因縁から因縁あつまつて、中に因縁深きいんねんよりくれば、小供を育て育てる事情、追々考へてよく承知して、かしこへ出てはでるだけあれでこさりおやといふ事情もつてをさめにやならん、年々といふ重なればかさなるほど世上に理があるによつて、身の處にてすみやかといへば、内々事情すみやかといふ事情によつたら、尋ねでにやならん、一日二日事情にさだめてみやう。

△明治二十四年五月二十五日梶本松二郎身上速やか

ならぬにつき一度御願

さあ〳〵ぜんに事情、身に一つ事情尋る、尋るからさとししよう、よく〳〵の事情きゝわけたともきゝわけの理を胸にをさめ

にやならん、きいた理を忘れてゐてはならん、内々どうであらうと思ふ、心身の處にて不足なき理になつたならんなんにも思やせん、話事情心に速かとげにやならん、これでわかりたといふてなほしておいてなほしてゐてはどうもならん、それ〳〵あちやこちやとでればでてのかうといふ今日の一日の日にさづけの處どういふさづけ、心に授ける心の理をきくところ〳〵それ〳〵事情さしづなんでもかでも一日の日生涯さすけはどういふ授けあしき拂ひたすけたまへ天理王の命とこれを三ど又三ど又三ど三三三さあ理を渡しう、さあ〳〵しつかり受取れ〳〵。

△明治二十四年五月二十一日寺田半兵衛様娘かう、
孫貞之介兩人身上すみやかの上事情御願

さあ〳〵ぜん〳〵事情、身の處内々事情、どういふ事であろと如何なる事、二どの事情、それよりあんじる事であつた、一つの事情さとしたる事、一人事情としがなんぼになるをさめにやならん處もたす、どこからどうしてもかしこからどうしてもやる事は心にもたず、さあこれは不思議を事と思ふ、さあしばらくの處やで。

△押しての御願

さあ〳〵十九才〳〵はおもはくがあるで、何處へもやるのやないで。

△明治二十四年六月三日梶本松二郎妻うの身上より
小人みち障につき御願

さあ〳〵段々〳〵に身上に一つ事情ありてかはる〳〵、第一身上一つ第一の處たへられん處第一身上小人といふていかなる事

であらうとおもふてあらう、事情きゝわけておかねばならん、身上にどんと不足なりたる事情ならいかにかうと思へども樂しみあらうまい、とうられんといへども話聞いてあざやかなれば話は間違ん、内々事情小人一寸は何かの處きゝとれ、ぜん〳〵より傳へてある、一ど二どの話じやあるまい、長らくの理にも聞いてをさめてゐるやらう、ふるき淺きはない、數あらためるはふるき一寸にはおもはく、それ〴〵思へど云へまい長らへて道すがら、之れまで通り來たる道、つくす一つは道といふ、たすけりやたすかる、思へばおもふ、廻れば廻るこの理第一さとしおく、もうまあ一時といふて云へん、つたへたる理は運ばにやならん、如何なるもはこばにやならん、よくできたといふかげひなたこの理さへさだめてゐればこれだけさとすによつて、しつかりきゝとらねばならうまい。

△明治二十四年六月三日橋本永尾兩人三重和歌山兩縣下巡敎御願

さあ〳〵〳〵〳〵處々の心にまかせる、それ〴〵の事情一寸でこす順序の理を以てあざやか、十分のまんぞくをあたへる、いさんで立ついさんではたらく、又一寸はからずの事情、何處から見てもあれでこそといふ理を以つてをさめる、くもりがあつてはあざやかとはいはん、子を育てる理を以つて、心おきなう立つがよいで。

△明治二十四年六月三日寺田半兵衛娘たき二十六才身上障り御願

さあ〳〵身上尋る〳〵、どういふ事であらう、いかなること尋

る、身にあんじる事はいらん、なれど日々思ふ一寸わからんとおもふ處、この事情といふは、どうでもかうでもわかりてこにやならん、しゆん〳〵の理があるによつてせいてはいかん、ぜんぜん諭したる、一名一人の事情さとしたる、事情一寸はわかろまい、長いといへば長い、一寸くらす中一つい〳〵までといふ事情ある、やうきゝわけ、こゝ二年三年たつたならすみやかおもはく事情ある、内々おなじ事情であるといふ、どうなりかうなり日々の處、あんじてはならん、あんじればあんじる理がまはる、何程あんじたとて、どうでもかうでも通さにやならん、しゆん〳〵さとすによつて何にもあんじようして、身の處速かなれば、さしづといふ、身上から尋ねだしたら安心といふ事情をさめにやならん、やうきの處事情もつて日々といふ、これだけさとすによつて。

△押して今日より御別席運して貰ふ事情御願

さあ〳〵尋ねる處、席といふは十分運んでやるがよい、席は見分けきゝわけといふて、取次の者にさとしたる、何度といはん、つくす運ぶ中、見わけにやならん、早くとりついでくれるがよい。

△明治二十四年六月八日越後地方へ本部より鴻田氏出張願

さあ〳〵尋る事情、ぜん〳〵一つ人々かはれど一人事情、一人の事情が心一つ心實あればなん時なりと、一度一つといふ、心實あれば運び、運べば世界をさまる、そんな遠い處に年も年や、人々云へばどうともいはん、先々處にて事情なればひまが

いる、そこで二名三名事情はなんでも運ばにやならん、一寸理があれば深き事情がある、をさめた事情は一名たよりさきゞ一寸話を聞いてをさまる、そこで二名三名でなければいかんいかんやないけれどひまがいる、古き事情いて一度の理がある、内々事情地塲一つといふ、皆々代つて出るといふ、何時の事情でもゆるそ、人々入かはりてでけにやならん、一日の日にどんな事が出けるやらしれん、一寸ひまならいて來うか、ひまの時心しづめてたんのふの心もたねばいかん、まよいひまやひまならゆつくりせにやならん、さうせにやたちいく處があろまい、こん日は一寸ひまといふ心つゞく、いかうひま處やない、それに日々つとめて一日二日ゆつくりときのやしなひなければいかん、内からいたらかういふことにばこんきたら、こちらからいれてかうといふ、此の道は大きい心もつては、大きい道になる、小さい事におもふてはならん、小さい心もつてゐては、あちらからにほひ、こちらからにほひ、一つのぢやまになる、ころりとまちがふで。

△同頃前の指圖につき本部から行つて邪魔になるであらうと話してゐる處へ

さあ〳〵〳〵その理や〳〵、すつきりわかつてあらう〳〵、力といふものはしつくりすれば、なんぼでもしつくりするものや、その理は大きい理、大きい理は皆うつりくる、あちらこちらに追々小さき區別がわかる、思ひはころりと違ふてある、其の心であつかふてくれるやう。

△同又何か談事の上願話してゐる處へ

しやん〳〵〳〵、思案して人々さだめて願へば、理をゆるそ、ゆるさにや出らりやせんで。

△明治二十四年七月四日寺田たき前々の事情から再び御願（二十六才）

さあ〳〵これまでの事情、だん〳〵それ〳〵、おや兄弟、それ〳〵身の處願ひ一つの事情あざやかといふ、一日の事情一日事情は、いつ〳〵まで生涯、さあこれまでつくす一つの事情、今日一日の日はいつ〳〵事情にさづけ事情わたすによつて、しつかりうけとれ、授けはどういふ授けさあ〳〵。

あしきはらひたすけたまへ天理王命とこれを三度又三度、又三度三三三さあ理をさづけるで、さあ〳〵しつかり受けとれ〳〵。

△明治二十四年七月四日紀州和歌山集談所地所買入の事情御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情は長らへての道、筋といふは道があつて何年事情といふ、事情ありてどうなりかうなり、つひ〳〵かさなりねん〳〵の道、年々の道は一寸には見えん、見えん事情一つ運び、いかなる事情もあり、一寸尋る事情十分さき〳〵一つ心にまかせて一つには他所とこころ〳〵、一つ心の事情、道理の理にきかせおく、その通りはからへ、はからへ事情十分さとしてつくす事情一日といふ、その事情まかせおくによつて。

△明治二十四年七月八日寺田半兵衛娘こう十九才なるもの七月三日よりせき出で腹へひゝき痛、頭痛したる處、四日に姉たきお授をいたゝき歸宅いたし、早速御願候處、直に頭痛は癒り、餘りの御利益なし、又候半兵衛五日の夜頃、右の脇腹よりかふらかへりしたやうにて、一時間ばかり身の自由用叶はず、又六日右の肩につまり、頭痛致し候に付七日に御地場へ出て其御願仕り候處御利益を戴き候ゆゑへの御願

さあ〳〵尋ねでる事情〳〵身の處こて事情一つ事情又候〳〵一つ事情どういふ事であらうと尋ね出る、めん〳〵事情にては、これまでほのかにきいてもゐるやろ、右はあく左はぜん一つ〳〵しらせ、へんじよたる處、又々事情、それ〳〵一日の日を定めて、それ〴〵身の處今日と定めば一つさわりといふ、障といふ理聞分け、右はあく左はぜん、へんじよたる處、一時なんともわからん、むつかしい處へはつれていかん、今日はどこそこへと思ふ、助け一條はいかにやならん、行けばさとす理、世上一つの事情、これさへもつてゐれば一つもあぶなきはない、へんじよ理つきすいて一つ内の處今日といふ、右左さしいりて、いつ〳〵まで事情といふ、一つには小供といふ二度三度きいたる、一つの心がある、年限事情さとしおいたる處、三年すみやかといふ、皆くもりなきやう改めて、それで傳はる一つのぞみとさとしてある、一時さとせん心に三年といふ、生れ子同然、一つの理になりてさとり掃除一つ事情、すみやかなり一つ

事情、身の處にて十分あざやかといふ、どんな事もおもはずして、ほんにこれでなあといふ事情運んで同じ兄弟同じ中、三年といふ事情きつておくによつて。

△明治二十四年七月二十六日天水組林氏紀州日高村行に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、所々といふ處々わかりある、わかりない一度速かなる事情、先々どんと一つ事情わかりあつてわかりない、あれもこれもといふ、しつかり事情改めてくるがよい、心おきなう。

△同身上御願

さあ〳〵身上の處、尋る事情〳〵、一時事情身の處、どういふ事である、日々の事情心事情、ようきゝとつて身上はかりかたない事情である、身あざやかなれば、さとす二つ一つの事情、身上よのぎほかのぎであろまい、事情一度心一つ事情しんじつ心定め、事情があらう、どういふ心ももたずこれだけどこまでいつ〳〵まで事情いつたあいなあといふ、あんじる事いらん、あんじようはなし通り事情、だん〳〵の理、一つの事をもつて運ぶ、日々をさめて又々の理みえる、一つの理見にやなろまい、みせにやなろまい、これだけさしづにおよぶ。

△明治二十四年七月二十三日夜八時御本席様御身上御障につき御願

さあ〳〵尋るからはしつかりきゝわけにやならん、尋る〳〵尋るばかりかいたばかりではわかろまい、かくだけでは尋るまで、日々席事情、どうなりかうなり運び、はこぶ〳〵萬事さし

づ、これまでそれ〳〵はこび、どういふ事もたづね一時の處さしかゝるどういふ事さしかゝる、一寸暫く事情とりにくからう、日はきらんきゝにくからう、さしづ〳〵かづ〳〵の事情はわかろまい、ほんのかつてだけむにしてしまい、これまでといふは、皆夫々話々の事情にて、決議の事情、尋ね一條にさとし、さとした事情は一寸をさまりは、そこい〳〵の事情もちいた理もある、なれどかつてこれはこれだけといふ、如何なるもばんじあらためて、これからといふさしづ通り、神一條の道であらうがだんじあひ、神の理であらうか、このはじめた道人間心の道であらうか、とりなほし何がばんじ指圖一寸事情はじつくりやすめさすから其心でいてくれ。

やすむといふはどういふ事やすめさしてはどんな事も尋ねられようまい、どんな事願ふたとて出來ようまい、これをしつかりきゝわけ、身の處自由用自在といふてある、身のせつなみめん〳〵できるかできんか、ようきゝわけ、今といへば今、後といへば後、さあ〳〵ようしつかりきゝわけ大事の處やで。

△明治二十四年七月二十三日夜先からのお指圖に基

きて御願

さあ〳〵如何なる事情、これまで〳〵尋ねでる處ぜん〳〵の處から一寸にはわかろまい、どんな事もわかろまい、なれどわからん事は云はん、皆心の理がそろはぬからわからん、ぜん〳〵にもさとし、刻限の理にもさとしたる、指圖の理を以つて取扱ふ處々さつぱりわからん、皆道具よせてある、尋ね出ば神一條の道であらう、どうせかうせとは一度もいふた事はない、なる

やう行くやうかんなんならかんなんだけ思はねばならん、其の理が重りたらどうもならん、同じその中に上下の理はないで、わからん理におされる、一度よい二度よい、三度よい、神がゆるしてかうといふ理は一つも用ゐてない、互々理をくづし、日々の處さしづともいふまい、尋ねて云はうまい、わからん〳〵の中からしつかりたよりをきいてたよりをつとめてゐるやうなもの、尋ながら今日の事情によほどさしつかへてある、人間の心の理がみな相違するから治まらん、まあよいは〳〵人氣〳〵世界〳〵たれ〳〵、天理教會にはおしてはない、事情は皆世界であつまりたる處、これで盛大や〳〵と思ふ心が間違ふ、この日を見るのがなか〳〵やあらうまい、めん〳〵話方傳方、世界つくすものの心をさつしるなら、間違ふ事はない、これを台として皆さとしてくれ、いつもや〳〵といふて、遂には理をおされて、どんなくらがりともわからん、だん〳〵道の爲たすけ一條のためとほりたらわかるやろ、あと〳〵の道をおもふてみよ、なみ大抵の道やあろまい、一時ぜん〳〵ふかきさとし事情によりて取扱六ケ敷からう、世上事情皆心をよせる、あの者の云ふ事たてにやならん、めん〳〵眞實誠一つの理をたて、かんなんの道もわすれてはどうもならん、世上明るい道でも何時くらがりともわからん、是迄の道を忘れぬやう、忘れさへせにや、漸々の道はゆるしてある、神一條より外の道は通れまい、一度は通り二度は通る、三度はむりに通る、神一條指圖より外の道を通るものはわけてしまへ、さあ速か身上をたすける事情にはこんでくれ、席といふ何ケ年以前より、くらがり〳〵なに

もわからん中からの理運んで來た理を聞き分けてくれるなら、理をゆるさう、之はこんな事情や、こんなものやといふやうではどうもならん、さあ〳〵日々の事情にさんげ事情これが第一しつかりきゝわけ。

△明治二十四年七月二十四日午後二時昨夜の御指圖

にもとづきさんげの處本部員一同に御願

さあ〳〵まあ一寸の處、どういふ事はじめかけ、よき處の理、又々の理、どんとならん理、三つの理をさとす、だれにどうとはいはん、これまで道を通し、どんな中もつれて通りた、これから先々どんな事もわかる、わかるから聞分け、しらん間はほのかのもの、わからん間は聞分け出來ようまい、わざ〳〵しているとわからんなれどだん〳〵道を通りたら、あら〳〵わかりてある、又一つの道もわけにやならうまい、だん〳〵むかふ先年限かさなる事情せまる、せまる事情あればどんな日もあると思はにやならん、さきの樂、今の一時にとりてはならん、どんな指圖してなりと通さにやならん、どんな一騎當千わかきといへど若きがわかきにたゝん、年よりが年よりにたゝん、是までの處にて古き道を尋ねてみよ、つゞまるはじまり尋ねて見よ、あら〳〵わかる、初め尋ねばいつ〳〵までも十分といふ、どうもならん、どんな山坂あるやらわからん、何程どうしてやらうとおもへど神一條の道を忘れては、山坂ころつとおちにやならん、このや敷たすけ屋敷といへど、めん〳〵の心のさいにかさなれば、どんなさいがあるやらわからん、遠く處は遠く處の理がある、一時きいてわれ〳〵理をこしらへるならかへしてやら

う、つんでやらう、たしてやらう、心定めて見よ、じゆん〳〵道は、日々しらす、日々しらす理にはかりがたないからよくきゝとつてくれ、さあ〳〵身の自由用ならば、前々席事情、しばらくやすむといふてある、身上に不足あれば、日々とほる事できようまい、一つには願事情とまりたと思ふ、日々助け一條の道、日々たのもしい道一つ一席の事情はゆるしおかう、十分にだんじる事情の理、中ほどに伺ふ又尋る一時事情にもとづく事できん、その事情どうもきゝにくい、どんな話もなるほどこれは地場から理をつたへてきく咄しさかんな事なら一つの道の話かと、こくびをかたむけてなるほどときへ、しらず〳〵の道わからず〳〵の道みず〳〵の道ある、これ三つでかけたらどうもならん、さかんほどめん〳〵の心を静めてかゝるからさかんといふ、心に理があれば勝手の道といふ、勝手の道はさかんとはいへやうまい、くらがりの道が見えてあるからさとさにやならん、しつかり皆につたへておさめてくれ。

又席々といふてはこんで理をもつてたちよる、めん〳〵心にとりて如何なる理もきゝわけてなるほどといふ、どんなさんげもせにやならん、なにかの事もきいていかなる事情といふ。

△明治二十四年八月二十九日永尾身上願

さあ〳〵身の處〳〵、自由用といふ理をきゝわけ、なろまい〳〵事情きゝわけ、むつかしい事云はんなろまい、一時の理にはなろまい、身に理がきゝほのかの理、ぜん〳〵の理もあれば前々の理もある、ほのかの理をどういふことであらう、身が一つ不足、日々の處、一時ならうまい身の處一時ならん、身の處

せつなみ、さき〳〵せつなみの處、さだめおかねばならうまい、さき〳〵塲によつて一度二度三度ならん事情、さき〳〵の事情より一度のば二度の塲、三度のばよぎなき塲がある、定めて心にとりて早く身に一つ事情あれば一時運ぶ事情はこびがたない、あんじなきやう一つ事情。

△明治二十四年九月七日寺田半兵衛身上にて七日以前より夜分せき出で晝はすみやかなる事情の御願

右に付岐阜縣へ布教の義の御しらせか、又は講社の一つの理を設ける處の御しらせかの御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかなるも尋ね出るであらう、如何なるも一つにおもふ、一寸の始りたいさうと思ふからひまがいる、どんな處でもだんない、小さい所でもだんない、小さい處からほんになあといふ理、何程小さいかつてのわるい所でもかません、はじめる所きゝわけ、始めたら何處までもといふ理があるから世上といふをさまりたる處は始めといへまい、おふごふからといふであらう、大層と思はず、願通りおもはく通りかなへてやろ。

△岐阜縣の方の事情押して御願

さあ〳〵尋る事情、その事情といふはせく事上であらうなれどいつ〳〵まで道といふ、道はながく事情どれだけせいたとて運ぶ事出來ん、よく聞分け、今や〳〵といふせいた事はどんな事はちやで出來ん、道はへだつといふ、一時尋る處どうしたらかうしたらよかろといふ事情、所にてだんじいくへの事情まかせおく。

△明治二十四年九月三十日大和國十津川日の元講派出の御願

さあ〳〵尋る事情、處といふ處に一つかたく事情、かたく理如何なる事思はず知らず道又一つにはいかなる事であらう、萬事の處にて、四方一つの理をきくなら、わかるやらう、そこで萬事咄し事情きかし、一名二名三名の事情をもつてをさめるやう。

△明治二十四年九月三十一日右につき山澤、永尾兩氏派出の御願

さあ〳〵處々への事情さとしにでる事情はすみやかゆるそ、咄しつたへ、じゆん〳〵速かつたへるなら、一つ理をさまる、萬事心得のためさとししよう、どういふ事さとすなら、心といふ、たぶん一つの事情はこぶ事情、萬事心に一つ心得、事情をさめて神一條といへばをさまる、なれど世界といふ、これが第一萬事心得一つをさめてやらにやならん、又一つ道の處、日々の處皆のためよのぎはない、外のきはもたずあきらか神一條といふ、是一つをさめて、いかんならんさあ〳〵心おきなう。

△明治二十四年十月十二日天水組分教會の願

此時先生方は鴻田様、高井様當直書取山本様、願代理桝井様、當周施方は高木光原、下の辻、西村、中井、松本、北にて西川、山内、吉田合せて八人

さあ〳〵尋出る事情、いかなる理を尋ねでる、ぜん〳〵さとしてある、ふかく事情さとしてある、みな〳〵の事情さあ一つの

心にみな〳〵の理尋ねかける理は十分にゆるしおかう、この理にそれ〴〵だん〴〵運びかけ、だん〳〵運びかけ、しんじつの理にをさまる、それ〳〵心だけの理は何からなと運びかけ、理は速やかゆるしおかう。

△明治二十四年十月廿一日天水講社分教會設置御願

此時會長様始め書取永尾様、願代理宮森様立合

山本様、増野様、高井様、松村様

さあ〳〵尋ねでる處さぶしい心にもたず小さいことは心にもたず尋る願事情ゆるそ。

右立會ひし姓名、高木、光原、中井、西村、吉川、吉田、寺田合せて七名

△明治二十四年十月三十一日過日二十八日の朝大地震に付名古屋愛知支教會へ見舞のため宮森、永尾兩氏出張願

さあ〳〵尋る處、尋るまでや、事情大へん〳〵事情理處々事情きけばやれ大そう、やれおそろしい、やれこはや、やれおそろしい、これまでにはなし刻限事情にもさとしたる、今一時遠くほのかはなしきこへわかる一時の處一時尋る一つの理〳〵といへば一つ事情、先づ〳〵早くといふ處、受けとる〳〵、まづ内々から一名二名、一名二名ではあたわん、三名心得、他に事情いくたりはさとさん、まづほのかの事情とりはやく事情に運ばにやならん、さあ〳〵早く〳〵まつているで〳〵。

△各分教會より清水氏代理の義願

さあ〳〵そりや代理で十分、代理は十分なれど、内々三名なんでも立たにやならん。

△明早朝出發の御願

さあ〳〵もう一日も早く〳〵、早くたづねてあんしんの理をもとめるによつて。

△明治二十四年十一月一日（舊九月三十日）上田嘉次郎娘奈良糸事上から御願

さあ〳〵事情はとふまでや、尋るまでやで、事情これまでさとしたる一人ぐらし一名暮しとさとしたる、一人内々さとしたる、重々きいてなんたると日々おもふてくらしゐる處、なんにもむりにどうせといはん、心といふ心といふはめん〳〵身の處、身と心と違ふといふは、心といふ理をさとしてある、一人暮しといふは餘儀なく理一つの理には一寸どういふ事、いつ〳〵までねきにゐて、日々せわどり、日々心にをさめるは事情、日々ふをかへたてかへたる處、どうでものかん、なんど事情氣がいづむはづじや、一つの理にかはるから事情めん〳〵これまでとはたからどういふたていかん、ようきゝわけ、人間わざでけるならきくであらう、神一條からさとしたる、不自由さうなんぎささう、不自由あるかないか、さつして日々どうなるとさつして、一人暮なら一人暮、今といふ今にいふやない、事情は世界に理がある、其の元といふたる理からだしてある、地場に心といふ理がなけにやならうまい、人間心はさらにな き、だん〳〵いんねん、其れ〳〵話しかけたる、心に事情もつ

て心いさんでをさめてくれるやう。

△明治二十四年十一月一日梶本松二郎土佐行もどり

大阪よりだん〳〵身上の障あげくだしにつき御願

さあ〳〵一時〳〵身上一時、身上せまる處、如何なると思ふさあ〳〵事情〳〵、さあ〳〵わづかの日がらこれ一つ、ぜん〳〵さとしたる處、身上一時といふ、よくきゝわけ、なによのことを聞き分けおかにやならん、一つ〳〵事情なんたる事情、さら〳〵もたず、一時さとしたる、ようきゝわけ、とほくはかるまた事情はかる、一時深き事情きゝわけ、さらにもたず、實に事情さとしおく、一時一つの事情、萬事事情きゝわけにやわかりがたない、なにか萬事さしづは間違はん、心一つからどれだけまちがふ一時身上なるにならん身上一時事情ではない、せまる

〳〵一つ心いそぐであらう、一時をさめきゝわけ事情をさまる〳〵心、事情とりかへ、これ第一をさめばをさまる、事情しらん〳〵道やあろまい、さしづしておくによつて、これよくきゝとりてくれ。

△明治二十四年十一月二日梶本松次郎身上願にわか

に御本席様御身上障り是も松二郎身上につき

さあ〳〵これ〳〵たちかはるで〳〵、どういふ事たちかはる、たちかへての話、一寸一時どういふ事になる、あんじる處、あんじにやなろまい、是迄の道筋、道すがら話〳〵の理で、神一條でできはじめかけたる、道具せいだいつかへばはそん、新しい道具、今一時きりはらひ、あたらしい道具なほしたいはそん、一つ理もある、なにかの事もきゝわけ、あたらしい道具よ

うきれる、美しい道具、日々古き道具、がた〳〵道具もある、ふるい道具はほつておき、新しい道具はようきれる、買うてめん〳〵一つ、めん〳〵といふ心一時はいそぐ、一時の道おそくなる、はつさん、さんげ〳〵〳〵〳〵〳〵といふ。

△又引つゞいて御はなし

さあ〳〵話しかけたら長い話、さあ〳〵すつきりおちないやうに〳〵かきとれ、あれ〳〵大へん間違、わからにや尋ねかやせ、どういふ話、めん〳〵に思案して見よ、どういふ思案、わからん、めん〳〵とりて思案すればわかる、めん〳〵何がちがふ、することなすこと間違第一にかゝる、一日二日せんにあつたら大變なる處道といふ早く道を渡ればせいたら道が早く大へんなる處道がつく、身上障るようきゝわけ、何程心得あつて日々といふ理といふ、これから理をきゝわけ、神一條の理身上の處あんじる、どうでもかうでもならん處おさへてある、もう一段さとする處、ようきゝわけ、めん〳〵の身みて見、なるほどの理、日々の事情ものなる程思ふはとなへ違はんやう、どういふとなへちがはん、しん柱〳〵といふ、紋形ない處から、眞柱と咄し一條でかためきたる、是迄むつかしい道筋、此迄長い道、中いくえ事情たちこす、神一條の理、神一條の理と人間といふ理がある、此世はじめかけたるも同じ事、道具をよせた月日道具なみ大抵でよせられたものでない、一時事情、道具といふは色々道具もある、話かけたる、それ〳〵といふ、多くよせたる、それ〳〵一つの道具といふ、道具からよせたあくどい程のはなし、わからん、わかりて道がつき、今にかい入れる道

具、古き道具がた〳〵の道具もある、だん〳〵道具引よせなければにやならうまい、只一つするみなするとう〳〵一つする、道具一つかたまる土をかためる、水といふ理がなくばかたまらん、又火といふものなければかたまらん、とんと事情わからにや尋くるがよい、古き新らしきわかろまい、今から一時の道、此理神一條の理、人間の理は世界の道理、多く事情、い〻かげんの理、一時たんなる身上から、事情あれば何たる、是迄外々道具十分内々道具十分、へんじよう身上さわり、これがどうもならん、どれだけ道具一時はそんの理がわからうまい、めん〳〵心いかなる理、どんとへりくだり、ふたまたの理はあらうまい、一時をさまる身がをさまる一時はやく事情さとしよ、世界一條、神一條ではじめた屋敷、どれから見るまこと一つよりをさまる、雨ふらうがすべる道はあらうまい、一時聞き分け、なにをすれどほつておかん、道を考へるなら身上から考へる、道の道理をこせんといふ、此の道わからにやどうもならん、生涯一だん〳〵のぼれども、二だん一時にのぼれん、身上あつて心わかる、如何なる理もわかる、身上から聞分け、だん〳〵あやまる、これかうしたらかへつてよい、一時へんじよ一つの事情一日二日の理が違ふたらどうならう、はこぶ道があつて世界といふ、ちやんと引よせるならん、しつかり眞柱ぢき〳〵の話きかさにやならん、又くるし〳〵たいて〳〵ぢやない、心いさんで氣がいさむ、よぎなき一つの心ようさだめてくれるやう、日々のへんじよう如何なる一つの道がある事情一つ、神一條の道である、多くの話あれば一つの話をさめおく。

さあ〳〵どういふ事ある、中々一つの理ある、中に一つの道ある、中一つのこへ、さあ〳〵萬事何か早く〳〵わからん〳〵、早く〳〵あと〳〵事情萬事何かさしづ事情にもとづき運びあつめ〳〵、早く事情多く事情ない〳〵事情早く事情いさい〳〵萬事さしづ一つの事情あらうまい、一時萬事心一つの理がをさまれば、早く〳〵といふ。

さあ〳〵尋る事情何か事情はんぜんせん、身上の處はんぜんせん、あんじるばかり、どんなこともぢつ〳〵とりけすことも出來ようまい、さんげ〳〵あと〳〵の道をおもふてとほらねばさき〴〵の道もわからん、遠く道もあれば日々の道もある、此の理を第一とりかへすること出來ようまい、此一つの理第一、一時の處なんたる處、一つの道むつかしい〳〵といふさしづ、是

までした事はない、あと〳〵の事情みて運ぶなら、また〳〵の事情ともいふ、先々の處わからん、あと〳〵のことわからねば、さき〴〵のことがわからん、日々の日よりくる、出てくるも一つの理、日々おもはねば如何なる理見にやならん、あと〳〵の理を定めてくれるやう。

△押して願

さあ〳〵一度の事情おさへておく〳〵、三日前よりおさへてゐる、この大事の事件どうなりかうなりむつかしい處おさへ、よういき、わけ、じようぶの處みれば一つの理たんのふ、今日から見ればわかろまい、此事情はやくにさとしておく。

△明治二十四年十一月三日梶本御身上きびしきにつき御願

さあ〳〵ウ……もう一さいあとの事情定めるも定めんもあろまい、神一條の事情二度三度の事情、聞分るならわからんやあろまい、さあ神一條の道といふは心に一つの理がなくばならうまい、かさなり〳〵〳〵の理がある、一時何かわからうまい、よう此をきゝわけてくれねばならうまい、いふまでやあろまい、あと〳〵の處一人一人さだめにやなろまい、いふまでやあろまい、定めるも定めんも定めてからをさまる、をさめてから定まるやない、定めるからをさまる、此の理をよくきゝわけねばならん、まあ何か萬事の處の理は一つの處、何も定めるもあろまい、定めてかゝつて神一條の道といふ。

△押して御願

さあ〳〵尋ねかやす處、おして尋る、まあ〳〵これをもなるものばかりよつておるので、もちなほしたる處、一念の理でをさまつたる、一時しばらくおさへてある處、もちなほしたといふたは、皆の理でもつてある、あと〳〵の處しつかりかためにやならん。

△明治二十四年十一月五日朝七時十五分俄に刻限のお話

ウ……ア……人間の義理はいらんで〳〵すつきりいらんで、人間の義理ばかりいふているでこんな事がおこるのや。

△明治二十四年十一月五日震災の爲め見舞に名古屋へ出張せし高井、宮森、清水、永尾歸宅の御屆

さあ〳〵まあ一寸の事であらうまい、少々の事であろまい、世上こはいものとこゝ一のおそろしいや〳〵、ふしぎ〳〵たて合ひ、事情聞分、心に事情をさめくれ、遠く處こゝろをさまる、なんぼうれしいともわからん、いつ〳〵までをさまるはこぶさしづ日々といふ、なにもおそろしい事はない、つるぎの中火の中もなんにもこはき事はない、ようはこびくれた、重々の理に受取る、一粒萬倍の理に受取る、事情きいて樂しむといふ。

△明治二十四年十一月六日朝敎長樣御令閨齒のいたみにつき御願

さあ〳〵尋る事情よのぎやあろまい、一つにはだん〳〵如何なる事よう聞取つて、一つ理を心に治め、齒がうづくといふ、もうこれ前々幾重のさとし、だん〳〵の理をさとしてある、これから一つ事情、今は一寸指圖しておく、何時刻限話するやらしれん、まあ一寸の指圖しておく、めん〳〵それ〳〵内々如何なるをさめかただより〳〵たよりの理はあろまい、大工一つの理をさとしてある、指圖をもつてはこぶ、まちがふた理をさとする、よう聞分け親一つの理といふ聞はみす〳〵一寸にも一つの心の理にもたず、はたの事、これ第一ほこりだん〳〵とほくほどすむ、近くはにごる、どうもみてゐられん、さあ〳〵一の尋るさしづ、事情はまちがはん、めん〳〵より合ふ心の理によりまちがふのや、きのわるい事いふとおもへば、そのまゝそう云へ、如何なる事も皆みてゐるで、どんな事もおれはそんな事き

かんと云へば、それまで早くつたへてくれるやう。

△明治二十四年十一月六日朝梶本葬祭來る十二日擧行の御願

さあ〳〵尋ねにやならん、尋ねて一つきいて、日々といへばどんなこともおさまる、一寸見ればかわいさうなものや、なんでやらう、せけん互々、それ〳〵思ふ、あと〳〵くわしくさとする、今尋る事情心の理をもたず、ほつておけとはいはん、處相應、みぶん相應の理によりて運んでくれ、あと〳〵の理をおもへば、せけんの義理はいらん、處相應身分相應にはからうてくれるやう。

△又押して日限の義御願

それは何時なりと其はゆるす。

△明治二十四年十一月九日午前一時半頃教長樣御身上願

さあ〳〵〳〵如何なる事〳〵尋る事情はこれ一つ事情、どういふ事、身上〳〵一つ尋る處、如何なる處、尋る處、身の處尋ねにやならんといふは、如何なる事、是迄さつぱりしらん、是からの道はむつかしいてならん、これむつかしいによつて、是迄いくえ、だん〳〵刻限の事情にもさとしたる、大抵の道は通れども、一つわからん、しらす〳〵の中、これまではやく〳〵理が急ぐ〳〵〳〵、よう事情きゝわけ、もうこれから何も思ふ事もなけねば、いふ事もない、道を道ときゝわけるなら、身上からみて見て一つ聞て一つの理ををさめねばをさまらん、おくれてならん、どうと心にはまらうまい、心に浮ぶまい、なんど

神屋の理を聞分るならわかるやらう。

△引つゞき（一本梶本松二郎つれかへりての話）

さあ〳〵〳〵、やれ〳〵〳〵、これ〳〵〳〵、さあ〳〵〳〵、やい〳〵〳〵〳〵、みな〳〵、さあ〳〵つれてかへたで〳〵〳〵、やい〳〵〳〵〳〵きいてくれ〳〵〳〵、これ〳〵〳〵〳〵きいてくれ〳〵〳〵、みてくれ〳〵〳〵、ウ……もう〳〵〳〵〳〵さあ〳〵〳〵もう〳〵〳〵しらず〳〵〳〵やつたわい、殘念な事や〳〵〳〵、さうであつたか〳〵、さあ〳〵今のさまをみてくれ〳〵〳〵、さあ〳〵あちらなり、こちらなりたのむわよ〳〵〳〵〳〵。

さあ〳〵あと〳〵きをつけよ、今一のものがたり、前々事情をもつて、かくれたる云ふまでやあろまい、すつきり〳〵〳〵

〳〵と。

△明治二十四年十一月九日引つゞき刻限のおはなし

さあ〳〵ウ……さあ〳〵〳〵刻限〳〵を以て話しかる、刻限をもつて話かける、是迄〳〵といふは長い道中、いかなる道、代々の事情〳〵、是迄〳〵〳〵事情をはなしかける、どういふ事情を話しかける、ようき、わけにやならん、第一事情の理をきかそ、一寸には筆先にもつくされようまい、身上の理と刻限の理と心の理第一、事情身上一條から事情立かけるなら、如何なる理も治まるやろ、皆世上のといふ理を思ひ運ぶ處の理をおもい、めん〳〵大きい處が思々の心、是迄何度くどき話、如何なる心の理といふは、只一時の理が解らんから、ぜひ〳〵の道を通り來たる、めん〳〵如何なる、おれはかうしてゐ

れど代々の道はをさめにやならん、むつかしいことやない、始めかけた道知らず〳〵の道、ほのかの處より始まりた、筆に色々つくしたる事情話、これから神一條の理、世界の理どういふ事定め乍ら、さがさにや分らん道やあろまい、わからん道から尋る、尋ぬるから諭しよう、諭した通りの道を通るなら、神の理なんが年めん〳〵察したる話、是迄知らず〳〵の道やあろまい、どんな事情があれど、みんなつれてかへる、事情眞柱といへば一戸しきのものなら、世界の理から見れば一戸一つの理にとるなれど、神屋敷神一條の理、身の處、心さんらんささうといふ様な理で始めた道か、日々事情いはず〳〵の理はあろまい、語らず〳〵の理はあろまい、世上から集めて取次といふ、取次なら話さにやなろまい、是迄よき事いへばよき事、あしき

の理もわけず、めん〳〵心といふ事情、神一條支配といふ、何度の事情もさとしおいたる、世上よりくる是からおれといふ、めん〳〵心の理をもたず、さとする道を早く、是迄きゝそこない、取そこないやあろまい、めん〳〵心といふ理、だん〳〵一時の身上から聞分けて、ぜん〳〵なさけの理を考へ、是よりは内々すつきりおもはんかまはんそれ〴〵よせたる、取次といふ道の處、早く心をよせ、如何なる處もをさめ、十分大層、又々内へもさとしてくれ、神屋敷といへば神といふ、神といへば人間の理ではあろまい、尋ねばきこえんやあろまい、一時早く定めてくれねばならん、うつとしいてならん、これはたれ〳〵とはさとされん、ひろく〳〵の心といふ、めん〳〵はかうといふ理はさら〳〵もたず、あちらがわるいこちらがかはるやうでは

一つの心とはいへやうまい、すつきり改めかへ、千里一またげといふ、さあ〳〵事情早くといふ。

△明治二十四年十一月十五日夜一時御本席様御身上より願

さあ〳〵〳〵〳〵ウ……ア……ア……ウ……ア……さあ〳〵〳〵〳〵話しや〳〵〳〵さあ〳〵〳〵どれから話そ〳〵、まあ〳〵〳〵だん〳〵〳〵、さあ〳〵〳〵如何なる事情、どういふ事もさつぱり洗ひ切る〳〵、あらひきつて立かへる、洗ひ切らんければどうもならん〳〵、いつ〳〵までもごもくや、ほこりだらけすつきり洗ひ切る、是より一つひらけたといふは、どうも受取にくい、洗ひきらねばどうしてもかうしても受取ること出來ん。大抵〳〵見のがし、暫くは見ゆるして來た、是から見ゆること出來ん、心に理がなくば幾度説いてもわからん、身上から指圖、一寸さしづがよかつたなあ、さしづ氣にくはなんだといふ、其の塲だけ、さあむつかしい事はいはん、早い理にさとす、まあ結構とおもふ、だん〳〵道をさとす、うつとしいやうではどうもならん、話や〳〵刻限や〳〵といふても、はんだんをつけんやうならどうもならん、さとしさとりではわからん、刻限の話ようきゝとれ、口中にふくむ理、是からといふはうつとしいなあといへばうつとしいなる、あきらかなあきらかなる、何も紋形ない處から傳はつて來た理、刻限の話うそがあるか、ようきゝとれ、神屋敷地塲といふ、とりそこなひしてはどうもならん、うつとしいやうではどうもならん、あきらか〳〵すつきり掃除〳〵するにはなしせねばならん、この位運

びこの位つくしてゐるのに、掃除〳〵なんでやろと思ふ、よその埃が見えて、内々の埃が見えん、遠くは明らか近くはうつとしい、足元にごる、身の内かりもの〳〵ときいた時だけ、一日たち十日たち、いふてゐるまた二十日たち、遂には忘れる、一寸箒を持つて掃除するやうなもの、始めは少しのほこりでも掃除する、なれどももう箒はいらんといふ、さあ〳〵つもる〳〵ごもくはすつきりきらい、明かなら心に心配はいらん、心配するといふは心に曇あるから、けふの日はあそびにゆく、てんきといへば結構、あたへも十分といへば樂みやろ、なれどさあ出ようとすればあたへは少し、うつとしい風が吹く、さあ樂みとなるかようき〻わけ、かはいからくどき話やでしつかりき〻とれ、これいへばどうやろ、これいへばはいりにくい、でにくい

といふやうでは、しんのより兄弟といへるか、遠慮氣兼人間の義理をやむは一の埃、あつきともいふ、さあすつきり掃除、すつきりならねば、どんな雨風でもこはいおそろしいはない、すつきり掃除をして心に錠前を下しておけ、遠りよきがねはいらん、すつきりいらん、遠りよきがねありてはしんの兄弟といへるか、互々のうたがひはりよきがねありてはどうもならん、遠神の理やない、此屋敷神屋敷といふ、どのやうにもいふ、みなつたへるやう、すつきり掃除が出來ねばよる理はない、大抵の道はといてある、そこで二度三度五度六度七度まではもうでありらうか〳〵とみのがしてある、すつきり掃除出來んやうでは、はらうまでやない、めん〳〵よりはらはれる理をこしらへるのやで、さあ〳〵雨風一時間のたゝかひでどうであつた、谷中如